

健啖家で同一化願望持ち
ちで毒舌(?)な幼馴染

重言 白

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒドインを参入させたかった。

NEOとイビルジョーと悪意を融合召喚したような。

原作がチートすぎて、チートタグがあるのか悩む。

ヤンデレっぽくしたかった……

目次

1章

だいぶ駆け足で進む第1話。オルクス

大迷宮前夜まで

1

オルクス大迷宮前夜〜ハジメ吹っ切れ

までの2話

19

ステータスを見たり、再開したり、出

会ったりの3話

33

ゆっくり語らったり、食べたたりする

話

47

ついに食べられた(意味深)なハジメ〜

1章終了とおまけの5話

64

2章

第2章に入った6話。ざっくりとフェ

アベルゲンまで

78

狂育(誤字ではない)パパのハジメさん

(7話)

94

蹂躪したり、探索したりの8話

109

ライセン大迷宮とミレデイ・ライセン

ぶっ殺9話

124

1章5話縛りでもしてたっけ?

文

字数稼ぎに走った10話

143

1章

だいぶ駆け足で進む第1話。オルクス大迷宮前夜まで

私は転生者である、名前はある。

ある日、突然空から降ってきたロードローラーに潰されて生涯に幕を下ろしたのですが、記憶を消さずに新たな生を歩むことと相成りました。

何故自分なのか、何のためなのか、遺族はどうなったなどという質問は多々ありましたが、暇を持て余した神々の遊びという動機しか返答されませんでした。

そして気がつけば私の姿は赤ん坊。

ふあつきんごっどなどと嘯きつつ、新たな両親から新川 音緒という名を与えられ、慈しまれながらすくすくと成長致しました。

そんな私には、好きな人がいます。

彼の名前は南雲 ハジメ。

彼との馴れ初めはまたいつか。

とりあえず両親同士の挨拶は既に済ませていきます。

将来の職場（予定）への挨拶なども行い、外堀は完全に埋め立て終わっています。

後は本丸を残すのみ。

「おはようハジメ。早速だけど、この紙婚姻届に署名して♡」

「勘弁してください……」

むう、私はこんなにも貴方を愛しているのに。

そんな私の想いを少しでも理解してもらうため、彼に抱きついてみる。

落ち着く……。

「はあ……おはよう、音緒」

「んー……ハムっ」

「ちよっ!？」

ハジメの耳、美味しい……。

ジュールジュールリ。

「じゆるるる……プハッ。昨日遅くまで起きてたでしょ。寝不足の味。それと栄養が足りない。弁当作ってきたから、食べさせてあげる」

「お・は・よ・う! 南雲くん、音緒!」

「あ、ああ。おはよう白崎さん」

「香織、おはよう」

「こいつは白崎 香織。」

私と同じくハジメに惚れている女だ。

恋敵というほどでもない、ただのお邪魔虫である。

私がハジメとイチャイチャしていると、いつも邪魔をしてくる。

こいつだけならまあ、嫌な奴というわけでもない。

むしろ友達として付き合うなら気のいい奴だ。

しかし、こいつが来ると、あのゴミ共も一緒に付いてくるからタチが悪い。

「南雲君、おはよう。毎朝大変ね」

「香織、音緒さん。また彼の世話を焼いているのか？ 2人とも優しいな」

「全くだぜ。そんなやる気のない奴に何言っても無駄だと思うけどなあ」

1人目は八重樫 雫。

香織のストッパーなのだが、殆ど意味を成していない。

香織の幼馴染で苦勞人。

2人目は勘違いゴミ虫。

自分を物語の中の主人公だと思っているのか、私や香織が自分に惚れていると勘違いしているゴミ。

死ねば良いのに。

3人目はゴリラ。

学名ゴリラ・ゴリラ・ゴリラ。

バナナを好む。

「おはよう雫。いつも言ってるけど、ゴミムシの分際で勝手に人の事を名前で呼ばないで欲しい。学習能力0なの？　死ぬの？」

「相変わらずだね音緒さん。でも、女性がそんな事を言うのはよした方が良くと思うよ？」

私、香織、雫の3人は学校で3大女神と呼ばれている。

この喋るゴミムシは、そんな美少女は自分に惚れて当然みたいなことを考えているゴミだ。

というよりも、自分の考えることが全て正しいと思ってるキチガイだ。

しかしこんなゴミムシに惚れる奴もいるのだ。

蓼食う虫も好き好きというやつだな。

~~~~~

「ハジメ。食わなきや力が出ない。たくさん食べてね」

私はいわゆる健康家だ。



毎日重箱5段程度は当たり前の量。

今日は10段作ってきたので、そのうち1段をハジメと一緒に食べる。

血や髪なんか入れてません。

味が落ちる。

どうせなら食べる私がハジメを食べたいな……

「南雲くん、音緒。お弁当、一緒に食べよ?」

「ん。香織のお弁当はだから好き」

「いや、僕は「ハジメ（南雲くん）に拒否権はない（ありません）」……はい」

逃げだそうとするハジメを捕獲し、ようやく一緒に食べ始めようとしたときに、あの

ゴミムシの邪魔が入る。

「香織、音緒さん。こつちで一緒に食べよう。南雲はまだ寝足りないみたいだしさ。

せつかくの2人の美味しい手料理を寝ぼけたまま食べるなんて俺が許さないよ?」

「え? なんで光輝くんの許しがいるの?」

「ゴミムシに食わす飯はない」

本当に死んでくれないだろうか?

友人の想い人だから手を出せないが、そうじゃなければ今頃コンクリに埋めて海に沈

めている。

そんな理性と殺意の闘ぎ合いをしていると、ゴミムシを中心に床がペカーツと光り始めた。

光は幾何学模様を描いて広がっていき、教室全体を包み込む。

愛子先生が異常に気づき、外に出るように指示をしたのと同時に、光が強くなった。うおまぶし。

~~~~~

気がつくと、巨大な壁画などが描かれた大理石の広間にいた。

周りにはハジメ他、クラスメイトと愛子先生。

さらにその周り、私達を囲むように白地に金の刺繍のなされた法衣らしきモノを着込んだ連中がいた。

豪華な法衣を着込んだ集団の中でも、特に豪華な格好をした老人が私達の方にやってきた。

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は聖教教会にて教皇の地位に就いております、イシユタル・ランゴバルドと申す者。以後、宜しくお願い致しますぞ」

好々爺じみた笑顔で挨拶するイシユタルと名乗るジジイ。顔見たらわかる。

狂信者だわコイツ。

そんな狂信者ジジイに従うのは癪だが、今はコレ以外の方法もないので付き従う。ジジイに連れていかれたのは10m以上のテーブルがいくつも並ぶ部屋。

愛子先生が上座に座り、ゴミムシから順に座っていく。

私とハジメは最後尾だ。

全員が座ると、こちらをずっと監視していたメイド達が部屋に入ってきた。

宮仕えなだけあり、美女・美少女揃いだ。

ハジメも見惚れているようだ。

「メイドさん。私にも1着用意してもらえる？」

「かしこまりました。あとで部屋に届けさせていただきますね」
良し。

今晩はハジメの寝室でメイド服での御奉仕プレイだ。

メイドさんとそんな話を話していると、ジジイが何やら語り始めた。

魔族と戦争したら負けそう。

神頼みしたら使徒（私たち）が召喚された。

使徒なんだから戦え。

要約するとそんな事を、恍惚とした顔で話した。

ジジイのアへ顔とか需要ないから死んで、どうぞ。

ほら、私の側にいるメイドさんもドン引きしてますよ。

「ふざけないで下さい！」

おお、愛子先生が立ちあがった。

戦争に参加しないしさせないので、さっさと帰らせてほしい。

生徒思いの先生らしい言葉だ。

しかし、狂信者の前では無意味である。

ジジイは、私たちを召喚したのは神であり、我々ではないので不可能だと答えた。

まっことクソである。

帰れないことがわかり、パニックになる生徒達。

そんな中、1人の男が立ち上がる……！

「皆、ここにイシユタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだってどうしようもないんだ」

ゴミムシである。

彼はあろうことか戦争参加を表明。

転移前からキチガイだとは思っていたが、まさか正義をお題目に人殺しを率先して行うサイコパスだとは思わなかった。

それに合わせてゴリラ、雫、香織も参加を表明する。

「私とハジメと愛子先生は不参加」

「なっ!!? 音緒さん、本気で言っているのか? この世界の人たちは滅亡の危機に

あるんだぞ!!」

「だからといって、自ら率先して人を殺しに行くようなサイコパスゴミムシにはついていけない。勝手にやったらば?」

「でも彼らを救わないと、僕らは元の世界に帰れないんだよ?」

「そこが問題。ハジメとの結婚式が挙げられない」

その時には、家族やハジメの両親にも祝福してもらいたい。

「……しようがないから、とりあえず今は指示に従ってやる。でも、いずれ抜けると、その学習能力皆無の脳で覚えておけ」

~~~~~

というわけでやってきました訓練場。

これから教官となる騎士団長から、ステータスプレートなるものをもらった。

自分の能力値を確認できるらしい……まるでゲームだな。

身分証にもなるらしいので、失くさないようにしないと。

血を付けることで登録できるので、早速登録。

コレが私のステータスだ。

|||||

新川音緒 17歳 女 レベル：1

天職：健啖家

筋力：10

体力：7

耐性：9

敏捷：9

魔力：4

魔耐：6

技能：消化吸収・胃酸強化・環境適応・言語理解

|||||

2D6程度のステータスだ。

となりのハジメのステータスは天職が錬成師で、能力値はオール10。

これくらいが平均なのだろうか？

そう思っていると、ゴミムシの周りが騒がしい。

ふむふむ、能力値オール100？

他の奴らもそこまではいかないものの、似たような数値？

自らの天職について騎士団長に聞いているのを見つけたのか、ゴミがハジメを馬鹿にし始めた。

どうやら自分のステータスがゴミムシより低かったので、自分以下のハジメにあたってはいるようだ。

「ステータスなら私の方が低い。私の天職は健啖家。どういう職業？」

「珍しくはあるが、1000人に1人程度はいるな。料理人に味見係として雇われている事が多い」

「そう。なら非戦闘職の私たちは訓練してもそうそう強くなれない。まずどういった事が出来るのか知るために、書庫を借りたい。ある？」

「ああ、王立図書館という施設がある……が、せめてレベルが上がるまでは参加してくれ。レベルが上がる時の成長度も確認するよう言われてるんだ」

仕方がないので訓練に参加することになった。

~~~~~

私は剣より槍のような長い武器の方が好きだ。
しかし今は短剣で戦っている。

訓練相手はステータスが同じくらいのハジメ。
良い感じに接戦を演じたあと、押し倒された。

「……初めてだから、優しくしてね？」
「ち、違っ！ そんなつもりじゃ!？」

残念。

そういえばレベルが上がった。

ハジメはオール12になった。

現在の私のステータスがこちら。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

新川音緒 17歳 女 レベル：2

天職：健啖家

筋力：11

体力：9

耐性：10

敏捷：10

魔力：8

魔耐：10

技能：消化吸収・胃酸強化・環境適応・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

ご覧の通り、私も殆ど伸びていない。

神とやらは私達のが嫌いらしい。

レベルアップもしたので、騎士団長から暇を貰い、今は王立図書館で読書をしている。

ハジメは北大陸魔物大図鑑という分厚い本を、私は世界の珍味くサバイバル編くとい

う本を読んでいる。

ふむ、木の実に見えても魔物が擬態した毒物の可能性もあるのか。

結構食べられる野草というのものもあるらしい。

(亜人の国でケモミミをモフモフしたような顔をしてるな……可愛い)

でも奴隷種族だからと悩んでいるようだ。

人魚も見たいと思っているな？

「コッチの文化にも刺身はあるみたいだよ。醤油はなさそうだけど」
「……なんで考えてることがわかるの?」

女の勘さ。

~~~~~

読書を一旦休憩し、外で一息つくことにした。

メイドさんに飲み物を貰い、ハジメの元に戻る。

「俺らがわざわざ無能のお前を鍛えてやろうつてのに何言ってるの? マジ有り得ないんだけど。お前はただ、ありがとうございまして言っていればいいんだよ!」

……あ?」

~~~~~

読書に疲れ、一度外に出て休んでいると、どこからともなく檜山 大介率いる小悪党4人組が現れた。

……スタンバっていたのだろうか?

彼らは訓練をつけてやるなどと言いだめた。

「いや、自分たちでやるから大丈夫だつて。僕のは放っておいてくれていいからさ」
一応やんわり断る僕。

「俺らがわざわざ無能のお前を鍛えてやろうつてのに何言つてんの？ マジ有り得ないんだけど。お前はただ、ありがとうございますつて言つてればいいんだよ！」

そういつていきなり殴りかかってきた。

……あれ？

ステータス的には大きな開きがあるはずなのに、とても遅い。

ハッ！ コレが走馬灯か!?

などと思つたりもしたが、かなり余裕を持つて回避できた。

あれえ？

「デメエ！ 無能の分際なに避けてやがんだ！」

やはり檜山の動きは非常に遅い。

音緒の半分……いや、それ以下だ。

いつのまにか檜山たちは4人がかりで殴りかかってきていたのだが、身体を軽く動かすだけで避けられる。

「……に焼撃を望む——『火球』」

「……に風撃を望む——『風球』」

放たれた下級の魔法もゆっくり飛んでくるので、剣を抜いて切り払ってみたら掻き消えた。

え？ どうなってるの僕!?

本当に彼らが訓練目的でやってってくれるの!?

「何をやっているんですか?」

「……ヒッ!」

気づくと音緒が戻ってきていた。

「どうせ性犯罪者4人組が、訓練してやるとか言って殴りかかってきたんでしょ」

「せっかくなので、私も入れてもらえませんか?」

「ええ、大丈夫ですよ。半殺し程度で済ませてあげます」

「……ひっ!結構ですっ!」

小悪党4人組は逃げ出した。

音緒……何したの?

「ステータスが上がったからといって、私を犯そうとしてきたので、叩き潰しました。彼らは文字通り、玉無し」

ヒエ

~~~~~

ハジメ自身は気づいていませんが、日々の訓練で彼には全身タイトのお姉さんから教わった武術を叩き込んでいます。

武術とは基本、弱者が強者を撃破するためのもの。

何の技もないテレフォンパンチ程度、どれだけステータスが高かろうが私の拳の方が早く鋭いのです。

常日頃からそんな攻撃を受けているハジメにとっては、テレフォンパンチごとき止まっただけで見るでしょう。

そこで反撃しないあたり、ハジメは優しいですね。

私なんか襲いかかってきたとき思わず、伊勢神宮で出会った女性に教わった強姦魔撲滅ライダーキックを叩き込んでしまいましたよ。

彼女とは妻として夫に尽くすという点では意気投合できたのですが、貞操観念に関しては真逆でした。

1人で満たせるように努力するのは前提条件、夫が逃げないようにハーレムで囲むのもありだろ思う。

一夫一妻主義の彼女とは、少しばかり地形が変わる程度の喧嘩をしたっけなあ……。  
今ではメル友ですが。

「そういえばさつき騎士団長から聞いたのですが、明日から「オルクス大迷宮」というダンジョンに向かうことになるそうです。準備をしておきましょう」

そんな事よりも今すべき事をしなければ。

サバイバルキツトは忘れずに。

## オルクス大迷宮前夜〜ハジメ吹っ切れまでの2話

「オルクス大迷宮」

それは全100層からなる云々。

気になる人は原作読んでね

つまり初心者から上級者まで、誰でも入れる魔物が湧くダンジョンだ。

今日はそのダンジョンに挑戦する冒険者達のための宿屋町「ホルアド」で、ダンジョン突入前夜を過ごしています。

「というわけで、御奉仕致します。旦那様」

「どういうわけ?!?」

あのメイドさんから貰ったメイド服を、自分の身体にピッタリフィットするように改造したら御披露目がだいぶ遅れたのだ。

逃げ出そうとする旦那様を落ち着かせ、全身をマッサージしていく。

「全く、私の指示したトレーニングよりもだいぶ多くやっていますね? オーバーワー

ク気味です」

「……わあ、旦那様のココ。硬くなってる」

「ほら、メイドにお任せください」

「ななな、何やってるのっ!」

マツサージです。

~~~~~

勘違いしたことに気づいて赤面している香織を眺めるのは楽しいのだけれど、そろそろ本題に入ってもらえないだろうか？

「え!?! ああ! うん、実は……」

私がお邪魔虫のヒロインムーブを映すとても？

残念だったな、カットだ。

要約すると

南雲くんが消える怖い夢見たから街で待機してて。

私は南雲くんが土下座している姿に惚れました。

以上!

「いや酷くない!?! そのまとめ方だと私ただの変人だよ!?!」

「え、違うの?」

香織は顔をヒクつかせながら、私を連れて自分の部屋に帰っていった。私が残っていると、ハジメのハジメテが奪われそうな気がしたそうだ。

……お邪魔虫め！

~~~~~

翌日

オルクス大迷宮20階層まで来た。

基本騎士団の人や前衛組がモンスターを抑えていたが、時々コツチにも来る。

一応剣も持つてはいるが、主に使うのは短剣。

槍は狭い洞窟では使いづらいので置いてきた。

こちらに飛びかかってきた魔物をすり抜けざまに、喉を掻き切り心臓を貫いた。

……思ってたより何も感じないものだな。

魔物といえど命は命。

日本人の命を奪う事に対するどうしようもない忌避感があると思っただが、そうでもなかった。

ハジメもハジメで、魔物を錬成で作った落とし穴に嵌めてから冷静に対処していた。

そんな中、前方から岩が飛んできた。

いや、岩と思っていたのは擬態で、実際にはロック・マウントという魔物だったが。ルパンダイブで飛び込んで来るのが、ただただキモい。

「私の体は上から下までハジメの物。クズが下劣な視線を向けるなよ」  
脳天目掛けて短剣を投擲。

見事目玉に突き刺さった短剣から与えられる苦痛に悶え、のたうちまわっている屑の残った目に剣を突き刺して脳をぐちゃぐちゃにかき混ぜる。

……スツキリした。

前線では何か強敵でも出たのか、ゴミムシが大技ブツパしていた。

崩落の危険性を知らないらしい。

それがゲームみたいに、どんな大技を使ってもステージは壊れないと思っ  
ているのか。

「……あれ、何かな？ キラキラしてる……」

崩れた壁から綺麗な鉱石が露出していた。

騎士団長いわくグランツ鉱石と言う名の綺麗なだけの石ころ。

結婚式でよく選ばれるのだとか。

「ハジメが私に送ってもらったときは、もっと実用性のあるものがないな」

そんな風に思っていると、玉無し性犯罪者の1人が独断で取りに行き、トラップが発動した。

馬鹿は死んでも治らないというだけあり、玉無しになっても治らないらしい。

~~~~~

気づけば見知らぬ階層。

どうやら転移系のトラップだったらしい。

後ろには上層に続く階段があり、後ろには奥へ続く階段、私たちは底の見えない手すりのない橋の上にいた。

「お前達、直ぐに立ち上がって、あの階段の場所まで行け！　急げ！」

騎士団長の再起動が1番早く、他の奴らはワタワタしながら指示に従い始めた。

しかしダンジョンの罠がこの程度で終わるわけもなく。

橋の両端に魔方陣が展開された。

上に続く方には無数の、奥へ続く方には大きな魔方陣が展開されている。

やがて無数のトラウム・ソルジャーとベヒモスが召喚された。

トラウム・ソルジャーは剣を持ったスケルトンで、ベヒモスは角から火を噴くトリケ

ラトプス。

騎士団長とハジメの説得によりゴミムシはトラウム・ソルジャーに向かった。

私とハジメと騎士団は、ベヒモスを抑え込んでいた。

私と騎士団長がベヒモスの攻撃を弾き、ハジメが錬成で動きを封じた。

騎士団は近くにいた負傷者を背負い、撤退していく。

作戦通りに進めば、私達が時間を稼いでいる間に後衛たちが魔法攻撃を行う準備をする。

今やベヒモスは殆ど埋められ、私は飛んでくる瓦礫などを弾くくらいだ。

「準備できたぞっ！　走れっ！」

合図が来たので、ハジメを抱えて走る。

その5秒後、ベヒモスを抑え込んでいた地面が破裂し、ベヒモスが襲いかかってきた。

しかしベヒモスが突進し始めるよりも早く、様々な属性の魔法攻撃がベヒモスに降り注いだ。

このままなら逃げ切れる！

そう確信した直後。

私目掛けて1つの火球が飛んできた。

咄嗟に飛び下がって躲すも、それは橋を砕きメキメキと崩壊を始めさせる。

ハジメを背負っていては間に合わない。

「任せたっ！」

「うんっ！」

そう判断した私は、全力で香織に向けてハジメを投げた。

お邪魔虫に頼るのは悔しいが、ハジメの命が優先だ。

このままうまくいくはずだった。

2度目の故意の誤射がなければ。

「ハジメ（南雲くん）ッ!？」

明らかにベヒモスとは関係ない方向へ向けて放たれた火球に当たり、吹き飛ばされた

ハジメを助けに手を伸ばす。

落下中のハジメを掴んで抱きしめたところに3度目の誤射。

私は意識を失った。

~~~~~

ザーツと水の流れる音が聞こえる。

「寒っ……う、うん？」

冷たい風が吹き、冷えた体が身震いを起こす。

ここはどこだろう？

「……ハジメはっ!？」

そう思っ腕の中を見ると、しっかりと抱きしめていた。

良かった……

ハジメの安否を確認したらだんだん鮮明に思い出してきた。

あのクズどもが。

とりあえず体が凍傷直前レベルで冷えている。

私の魔法適性はハジメほど低くはないが、後衛職ほど高くもない。

いわゆる普通だ。

簡単な凶を地面に掘り、簡単な詠唱で火種を起こす。

……濡れた服を着ていたら風邪を引くからな。

コレは医療行為、断じてやましい事はしていない。

そう言い訳をしながら、ハジメのパンツ以外を剥ぎ取った。

……気絶している人の服を脱がすのは大変だった。

「うっ……痛っ。って、音緒? ココは?」

「わからない。ただ、オルクス大迷宮のどこか」



?????  
だ。

「キュウー！」

耳や鼻をしきりに動かし、何かを気にしているようだ。

「グルウアー！」

どこからともなく現れた二尾の白い狼達が、ウサギ目掛けて一齐に襲いかかった。

ウサギはその場で飛び上がり、1匹目に向けて回し蹴りを炸裂させた。

ドパンツ！

蹴りの音にしては色々とおかしい音と共に、1匹目はゴキヤリという音と共に動けなくなった。

ウサギは更に空中を踏み、2匹目に向かって隕石のごとく突進しかかと落とす。

2匹目は頭部が爆散した。

3匹目と4匹目が着地に合わせて突撃するも、竜巻のようなカポエラキックで壁に叩きつけられ、動かなくなる。

最後の1匹は尻尾を逆立て、固有魔法だと思われる放電を行い、電撃を放つ。

しかしウサギはそれも全て躲し、放電が切れたタイミングで踏み込み、サマーソルトキックで仕留めた。

見つかったらマズイな……そう考えるよりも早く、体が後退していた。



カラン

「あ」

足元にある石ころに気づかず、下がった拍子に蹴ってしまった。

音は静かな洞窟で嫌に響く。

気づかれてないことを祈り、ウサギを見る。

目があった。

顔だけをこちらに向けていたウサギは体をこちらに向け、突進してくる、

咄嗟にハジメを突き飛ばし、反動で自分も反対側に倒れこむ。

直後、私たちがいた場所に砲弾のような飛び蹴りが刺さり、地面が爆散したかのように

に挟られた。

ハジメは即座に錬成で壁を作るも、一瞬で蹴り碎かれて盾にした左腕ごと衝撃で吹き

飛ばされた。

私は残っていた短剣で斬りかかるも、短剣を蹴り碎かれてハジメとは反対方向に蹴り

飛ばされる。

衝撃を受け流そうとはしたものの、右腕がへし折れた。

ウサギは明らかに格下だと理解したのか、ゆつたりとハジメに向けて歩いていく。

私は何とか立ち上がったのだが、突然震えが止まらなくなり始めた。

それはあのウサギも同じようで、ハジメに向かっていた足取りが止まっている。

「……グルルル」

右側の通路から、太く長い腕と長い爪を持つ熊のような魔物が現れた。

ウサギは文字通り脱兎のごとく逃げ出したが、熊の爪から出た何かに斬り裂かれて崩れ落ちた。

熊は仕留めたウサギを爪を使って食べ始めた。

?????

逃げ出そうにも熊は鋭い眼でこちらを見ており、逃げれば先に殺すと考えているのがありありとわかる。

程なくウサギを食べ終え、先に狙われたのはハジメだった。

「うわあああー!!」

ハジメは熊の反対側へ向けて逃げ出した。

私は少しでもハジメが逃げるための時間を稼ごうと、熊に向かって体当たりをするも、全く揺らぐ様子すらない。

熊の爪が振り下ろされ、ハジメの左腕が宙を舞う。

?????  
だ。

壁に叩きつけられたハジメを他所に、熊はハジメの左腕腕を食べ始める。

ハジメは壁に錬成を使い穴を開け、その中に入って逃げていった。  
????????、  
????????。

餌だと思っていたハジメに逃げられ、怒り狂った熊でも岩壁は削りきれないらしく、  
上手く逃げられたようだ。

私は熊が食べ残したハジメの左腕を抱えて逃げ出す。

幸運にも、熊は壁を削るのに熱中していたので、追いかける事なく元の場所に  
戻ってこれた。

これからどうしよう。

ぐー

……こんな時でもお腹は空くらしい。

魔物の肉には毒があり、食べることができない。

私が持っていた食料は、落ちた時に全部流された。

????。

あ……1つだけ、毒のないものがあつた。

しかも今持っているものだ。

……イタダキマス。

ハジメの腕、とても美味しかったです。

# ステータスを見たり、再開したり、出会ったりの3話

ごちそう様でした。

ハジメの腕は本当に美味しかった。

あのクソ熊に殆ど食べられていたが、それでも少しは残っていたから。

……とりあえずあのクソ熊は食い殺す。

そのためにも、強くならなきゃいけない。

そう思いながら1夜？を明かした。

翌日、まずステータスプレートを確認した。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

新川音緒 17歳 女 レベル：4

天職：健啖家

筋力：100

体力：50

耐性：70

敏捷：80

魔力：60

魔耐：70

技能：錬成・消化吸収・胃酸強化・環境適応・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

あれ？

見覚えのないスキルが増えている。

と思つたには一瞬で、自分が昨晩食べた物の<sup>ハッ</sup>技能<sup>メ</sup>の<sup>の</sup>技能<sup>能</sup>を思い出した。

つまり、食べたものの技能とステータスを所得できるといふ事なのか？

食べた相手と文字通り1つになれる？ ……じゅるり。

「いやいや、それはダメ」

食べたら一緒にはなれても、<sup>ピーツ</sup>が出来ない。

それはダメ。

とにかく今必要なのは力。

幸い、餌は無数にある。

覚えたばかりの錬成を使い、ちようどいい長さの槍を大量に作る。

都合よくあの狼が1匹でいたので、身動きが取れないように周りを錬成で固めた後、

槍で扶る。

抉って抉って……ようやく動かなくなったので、そのまま食う。

「不味いッ！」

筋張ってて硬いし、エグ味が酷い。

ウサギはうまそうに見えたのになんと思っていると、いきなり身体に激痛がはしつた。

だが、食べるのを止めない。

視界が赤く染まり、全身から血が吹き出しているような気がする。

狼を完食した頃には痛みは収まっていた。

どんな技能が手に入ったかを確認するため、ステータスプレートをみる。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

新川音緒 17歳 女 レベル：6

天職：健啖家

筋力：200

体力：150

耐性：170

敏捷：180

魔力：160

魔耐：170

技能：錬成・消化吸収・魔力操作・胃酸強化・纏雷・環境適応・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

オール100アツプだ。

それと魔物の固有魔法も手に入ったみたいだ。

魔力操作は、文字通り魔力を手足のように使える技能だろうか？

そう思っていると、濡羽色だったはずの髪が、赤黒い緑色に染まっているのが視界の端に入り込んだ。

手足にも赤黒い線が入っており、まるでさつき食べた狼のようだ。

新たに得た技能の検証を行いつつ、新たな魔物を食べているとふと、ハジメの声が聞こえた気がした。

その後拠点で響く爆発音。

それはまるで銃声のようで。

思わず目の前のベヒモス擬き（多分亜種、氷属性）を手早く殺し、拠点に戻る。

そこには撒き散らされた水と肉の焼ける匂いと、血だまりが残っていた。

ハジメはどうやら元気になっているようだ。







装飾された大きな扉と2体の石像。

まるで何かが封印されているようだ。

ちようせんするまえに、現在のステータスを確認。

新川音緒 17歳 女 レベル：45

天職：健啖家

筋力：1000

体力：850

耐性：860

敏捷：970

魔力：800

魔耐：800

技能：錬成「+精密錬成」・消化吸収・魔力操作・胃酸強化・纏雷・氷結・毒物精製「+麻痺鱗粉」・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」・風爪・夜目・遠見・気配感知・魔力感知・気配遮断・環境適応「+状態異常耐性」・言語理解

筋力がついに、4桁になったぜ。

明らかに動き出しそうな、錬成できない（鉱物ではない）2体の石像を氷結で固めつつ、扉を良く観察してみる。

中央に謎の魔法陣が描かれており、鍵がかかっているかのように開かない。

何かを嵌めるような窪みがあるが、無視して錬成で穴を開けようとしたら、謎の力により弾かれた。

後ろの石像石化が解除され、サイクロプスが門番として復活……したのだが、凍っていて動けないようだ。

哀れ、遙か昔に封印されてようやく出番を迎えたサイクロプス（右）は、魔石を残して美味しく食べられてしまった！

サイクロプス（左）は、嘘だろおまえと言わんばかりの目を向けてくる。

残念、コレが現実ですという意思を目で伝えてみようとしたところ、凍っていない首から上をむちやくちやに振って暴れ発光し始めた。

それと同時になんらかのスキルを使ったようで、歯がなかなか通らない。

なので錬成で作った槍に毒を塗って刺すと、ビクンビクンと痙攣したのち大人しくなった。

毒が有るものは割と美味しいのだ。

ハジメの分として半分残したのち、抉り出した魔石を扉の窪みに嵌め込む。  
ピカーツ！

うおまぶし。

久々の強い光に混乱したが、少しすれば光も落ち着いた。

扉を開けると真つ暗で、夜目を使って何とか見えるくらいだ。

中は大理石で作られた荘厳な神殿のようで、中央に巨大な立方体のぬめりと光を反射する石が置かれていた。

よくよく見ると、立方体から何かが生えている。

「だれ……？！」

キヤー、シャベツター！

何かをよーく観察してみると、金髪美少女の上半身だった。

「ドーモ、ダレカニサン。新川 音緒デス」

挨拶は大事。

古事記にもそう書いてある。

挨拶を失敗したイザナミとイザナギは、やり直すまで忌子しか産めなかつたりした。

しかしコレは面倒ごとの気配が凄いな

だからといって、置いていくのもなあ……。



胸元に頭をグリグリと擦り付けてみたり。

「というわけでハジメ。よろしく」

「どういうわけで!?!」

かくかくしかじかまるまるうまうま。

「はあ……しようがないな」

良し。

ハジメはビカビカさせながら、立方体石を錬成し始めた。

なかなか抵抗されたみたいだが、やがてどろりと石が解けた。

「……2人とも、ありがとう」

「私は扉を開けただけ、ハジメならどっちにしても開けてたはず」

「ところで、名前は?」

「……名前、付けて」

ということになった。

ハジメの意見はユエ、私の意見はレイチエル。

結果、彼女の名前はユエで決定いたしましたー!

ちくせう。

全裸のユエにハジメの外套を着せたり、ハジメが何かを飲んだりしていると突然、気

配察知に強い反応が出た。

場所は真上、同じように感知したらしいハジメにユエを任せてその場を離れる。

ソレが落下して来たのと飛び下がったのはほぼ同時だった。

ソレは体の部位の数を2倍にしたような、凶悪そうなサソリの魔物だ。

門前のサイクロプスや、これまで戦<sup>食</sup>つて<sup>べ</sup>きた魔物たちと比べ、相当強<sup>研</sup>い<sup>い</sup>のが見ただけでわかるほど。

「上等だ……殺れるもんならやってみる！」

ハジメが吼える。

そしてさつき飲んでいた謎の液体をユエに飲ませ、戦い始めた。

あの魔物は基本、ユエと側にいるハジメしか見ていない。

尾の先から溶解液を放ち、2人を攻撃している。

とりあえず尾を斬り落とそうと錬成した刀で斬りつけたが、傷1つすら付かなかつた。

それでもうつとうしいと思ったのか、腕を一本こちらに向けて振るってくる。

「離れろ！」

ハジメの声に合わせ、縮地と空力を同時発動。

離脱と同時に、魔物は燃え始めた。



流石に熱いのか、のたうち周っている魔物を尻目に、甲殻を確実に砕けそうな武器を錬成する。

作り上げたのは巨大な杭と巨大なトンカチ。

ハジメが再び焼夷手榴弾を使い、飛び上がった時にそれは起こった。

「キイイイイイイ!!」

魔物が奇声をあげたかと思うと、地面が波打ち、無数の棘があらゆる方向から突き出された。

咄嗟にハジメの側まで飛び上がり、足元から迫る棘を避けたが、魔物はハジメに2本の尾を向けていた。

溶解液を空力で何とか避け、続く散弾針からハジメを氷結で守る。

しかし空中では踏ん張りが利かず、後方に吹き飛ばされてしまった。

「キイイイイイ!!」

1人残された私に向けて、溶解液と散弾針、ハサミが襲いかかってくる。

躲し、逸らし、防ぎながら時間を稼ぐ。

邪魔者にはいい加減イラついて来たのか、再び地面が波打ち始めた。

それは一度見た。

私の錬成は触れているすぐ側しか変化させられない。

だが、足場だけくらいなら錬成を封じることくらいできる。

四方八方から突き出される棘を砕き、溶解液を風爪で払い、針を喰らう。茹でてない素麺みたいな味がする。

「音緒、下がって！　蒼天！」

ユエの声に従う。

直後、魔物の頭上に青白い巨大な火球が出現。

魔物は逃げ出すも、直撃。

背中の甲殻がドロドロに融解している。

気配遮断をしたハジメに合わせ、私も気配遮断を使って接敵する。

背中に乗ったハジメに気づき、尾で叩き落とそうとするより早く、私が2本の尾を切り落とした。

ハジメが手に持っていた手榴弾を、銃で開けた穴に押し込む。

離れた私たちを見て、魔物は追撃しようとしたものの、ゴバツと体内で爆発が起こり、事切れた。

私は死亡確認をしたのち、かぶりついた。

「……伊勢海老みたいな味？」

強敵不仅有、美味しかったです。



ある味らしい。

その他にも吸血鬼という種族の話や、このダンジョンを作った反逆者の話もあったが、割愛するなり。

~~~~~

ハジメと私がクラスメイトに此処に落とされた話（ユエは泣いた）や、ハジメの持つ神結晶と神水の話（私がそれ無しで食ってる事にドン引きされた）をしたり、ユエを連れて一緒に地球に帰ることを決意したり……

「そうだ。ハジメ、武器作って！ 私の錬成じゃあポキポキ折れちゃうから」

「んー。シユタル鉱石製で良いか？ 魔力を込めれば硬くなる」

そうして出来上がった槍を装備し、ダンジョンを攻略していく。

というものの、全属性魔法ならお任せのユエと銃で遠距離ブツパするハジメのせいで、使う機会が全くない。

更にはハジメが攻撃するより早くユエが魔法で仕留めるため、転移者組がまるでお荷物のように！

そうして進みながら、新たに降りたった階層は樹海だった。

撤退しながらも、何体も倒しているのに数が減らない。

1度高いところを陣取り、殲滅したというのに、より数を増やして特攻してくる。

「寄生……本体がいるはず」

寄生された恐竜たちの動きから本体の場所を予想、機動力に欠けるユエをハジメが背負い、走る。

時折血を吸っているのにイラつとし、邪魔するように現れた恐竜たちに八つ当たり気味に貫き穿つ。

そんなこんなで走りながら、前方の岩壁の裂け目に飛び込み、ハジメが錬成で裂け目を塞ぐ。

ハジメはおそらく本体がここにいると予想し、薄暗い洞窟を進んでいく。

開けた場所に出たかと思えば、全方位から緑色のピンポン玉のようなものが、数えるのが馬鹿らしいくらい発射された。

3人で背中を合わせ、迎撃する。

ハジメは錬成で壁を作り、ユエは風の魔法で全て撃ち落としていた。

私は氷結で氷の壁を作って防いでいた。

「2人とも、おそらく本体の攻撃だ。どこにいるかわかるか？」

「……………」

「ユエ？　音緒？」

「にげて、ハジメ！」

私の体が自らの意思に反し、ハジメに向かって槍を振るう。

隣のユエの頭上には綺麗な真つ赤な薔薇が咲いていた。

つまりさつきのピンポン玉が種子だったわけだ。

私たちの頭上の花だけを狙うハジメだが、上下運動を繰り返したり、腕を盾にするように体が動いてしまう。

そんな私たちに優位を悟ったのか、本体らしき魔物が現れた。

「ハジメ！　……………私はいいから、撃つて！」

あ、ユエ。

そんなことを言っちゃうと……………

「え、いいのか？　助かるわ」

ドパンツと、薔薇が撃ち抜かれる。

若干頭皮が削れ、髪が縮れたり千切れている。

本体の魔物もビツクリしてるよ……………ん？　あれ？

「てりゃ」

なんか体が自由になってた。

本体が呆然としていたからかな？

「……撃った」

「あ？ そりゃあ撃つていいって言うから」

「……躊躇わなかった……」

「そりゃあ、最終的には撃つ気だったし。狙い撃つ自信はあったんだけどな、流石に問答無用で撃つたらユエがヘソ曲げそうだし、今後のためにならんだろうと配慮したんだぞ？」

それは配慮とは言わないと思う。

「……ちよつと頭皮、削れた……かも……」

「まあ、それくらいすぐ再生するだろ？ 問題なし」

「うう〜……」

わかる、わかるぞ。

物語みたいに「そんなことが出来るはずがない！」

必ず助ける！」みたいな展開を

期待していたんだらう？

でも、今のハジメはちよつとアレだから……

「そーいや、なんで動けるんだ？」

まだ頭に花咲いてるのに」

「んー……慣れた？」

よく考えると、流石に呆然としていても本体の命を奪うような行動は出来ないと思う。

多分環境適応の技能で、文字通り適応したのかな？

ちなみに私に咲いた花は彼岸花だったらしい。

死人と言いたいのか？

~~~~~

ユエと共にハジメに甘えつつ、もうすぐ100層に到達する。

おそらく最期の階層なので、ステータスプレートを確認することにした。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

新川音緒 17歳 女 レベル：75

天職：健啖家

筋力：2470

体力：1890

耐性：2040

敏捷：2010

魔力：1890

魔耐：1890

技能：錬成「＋精密錬成」・消化吸収・魔力操作「＋魔力放射」「＋魔力圧縮」「＋遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・氷結・毒物精製「＋麻痺鱗粉」「＋神経支配」・天歩「＋空力」  
 「＋縮地」「＋豪脚」・風爪・夜目・遠見・気配感知・魔力感知・熱源感知・気配遮断・環境適応「＋状態異常耐性」 金剛・威圧・念話・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

技能の数も増えたなあ……

これでも、最近あまり増えることがなくなつたのだ。

強い魔物が餌の魔物を食べたところで、固有魔法を覚えないと同じではないかと、予想している。

そんな話をしている間に、無数の柱に支えられた荘厳な空間に着いた。

私たちが踏み込むと、全ての柱が淡く輝き始める。

そのまま進むと、最期の柱の先に大きな扉がある。

「……これはまた凄いな。もしかして」

「……反逆者の住処？」

「つまり、ゴール」

覚悟を決め、最期の柱の間をくぐる。

その瞬間巨大な魔法陣が展開される。

それはあのベヒモスを召喚したものよりも3倍は大きく、より複雑且つ緻密な魔法陣だ。

おそらく、ラスボスが召喚されるのだろう。

一瞬弾けるように強く発光し、光が収まった時には巨大な魔物がいた。

6つの色違いの紋様を持つ頭に長い首、鋭い牙を持つ赤黒い目をした化け物。

神話で例えるなら、あの怪物ヒュドラのようだ。

「クルウアアアン!!」

まず動いたのは赤い頭。

こちらに向けて火炎放射のようなものを放った。

私たちは別れ、それぞれ攻撃を開始する。

ハジメが赤頭、ユエが緑頭、私が青頭をそれぞれ消し飛ばしたのだが、白頭が叫ぶと

直ぐに復活してしまった。

“あの白頭を狙うぞ！ キリがない！”

“んっ！”

“了解！”

念話を使い作戦を受け取る。

青頭の吐き出す散弾のような氷の礫を私が防ぎ、ハジメとユエが白頭を狙う。

ドパンツ！

「緋槍！」

閃光と燃え盛る槍は白頭に向かうが、間に割り込んだ黄頭に防がれる。

回復役に盾役までいるのか、バランスの良い魔物だな。

今度は私が白頭に目掛けて量産型の投槍で攻撃する。

そして目論見通りに割り込んだ黄頭ごと、ハジメが上空で破裂させた焼夷手榴弾が焼く。

白頭が苦痛に悶える今がチャンス！

念話で合図を送られ、攻撃するよりも早く。

「いやあああああ！！」

「ユエ！？」

咄嗟にユエに駆け寄ろうとするも、緑頭が私の邪魔をしてくる。

ハジメも赤頭に邪魔をされているようだ。

「ユエの元に、早く！」

無理矢理作つた隙に縮地でハジメ近づく。

赤頭と緑頭の火と風の刃が後ろに届かないよう弾きながら、時間を稼ぐ。

“音緒、シユラーゲンを使う。連発はできないから援護を頼む”

“任せろ！”

ユエにより放たれる連続した各種上級属性魔法の雨。

それは赤頭、緑頭、青頭に大きなダメージを与え、直接的な攻撃を封じた。

残つた黒頭が再びユエに精神攻撃しかけるよりも早く、私の槍が頭蓋を貫いた。

さらに黒頭がサソリの魔物のように地面を波打たせたので、氷結で薄いが砕けないように氷を張り、攻撃を防ぐ。

黄頭は自分の体を白頭の盾にしたが、ハジメのシユラーゲンで纏めて消し飛ばされた。

黒頭は死に、白頭と黄頭が消しとばされたことに憤慨したのか、残りの3頭がハジメに襲いかかるが、私とユエの魔法が消しとばした。

ようやく終わった……

そう一息ついた時だった。

「ハジメー」

ユエの切羽詰まった声に反応し、顔を上げる。

そこには今まで何処に隠れていたのか、銀頭が出現していた。

銀頭はユエと私の方を向き、タメすらなくシユラーゲンに匹敵するほどの極光を放った。

ユエは魔力を使い果たして、動けるような状態じゃない。

咄嗟にユエを範囲外に出るように突き飛ばした。

~~~~~

「音緒ー」

極光が音緒を飲み込み、直撃を受けなかったユエとハジメでさえ余波で吹き飛ばされた。

極光が収まり、ユエとハジメは全身に走る痛み呻き声を上げながら体を起こす。

極光に飲まれる前に、音緒がユエを突き飛ばした光景に焦りを浮かべながらその姿を探す。

音緒は大きく吹き飛ばされていた。

横たわったその全身から煙を吹き上げており、ハジメが作った槍（ゲイボルグと名付

けようとしたら、当たらなくなると言われて無銘になった）の融解した残骸が側に転がっている。

「音緒！」

ハジメとユエは駆け寄って容体を見る。

全身が灼け爛れ、両腕は骨が露出し千切れかけている。

さらに左目は潰れ、血が溢れている。

とにかく神水を飲ませようとするも、そんな時間をヒュドラは与えない。

先程の極光の縮小版、直径十センチ程の光弾を無数に撃ちだしてきた。

とりあえず柱の陰に隠れるが、光弾は柱を削るように無数に撃ち込まれる。

ハジメは急いで全身に神水をかけ、一本を飲み込ませようとするも飲み込む力さえな

いのか、むせて吐き出してしまった。

ハジメは自分の口に神水を含み、音緒に口付けして無理矢理流し込んだ。

神水は止血は行ったものの、何故か傷はなかなか回復しない。

極光には肉体を溶かす毒が混じっていること、それに欠損した部位を新たに作るほど

の回復能力はないのだ。

「……今度は私が助ける……」

ユエはそう言ってハジメの血を少しだけ吸い、柱の影を飛び出していった。

その程度では最上級どころか上級魔法すら使えない僅かにしか魔力は回復しない。

ハジメも戦うために、柱の影から飛び出た。

ドンナーから放たれた弾丸が銀頭の額に直撃するも、軽く傷が付くだけで致命傷にはならない。

「チイツー！」

アレを仕留めるにはシユラーゲンか、ユエの蒼天レベルの火力が必要だが、どちらもタメがある以上今すぐというわけにはいかない。

ハジメは肩に光弾を受けて吹き飛ばされたユエを抱え、ひたすら光弾を避け続ける。

く
く
く
く
く
く
く
く
く
く
く
く

いたい

くるしい

つらい

くらい

おなかすいた

こげくさい

からだがうごかない

そんな状態でも、私の意識はなんとかあった。

つまり、ハジメからキスされた記憶はしつかり残っているという事だ！

体がまともにも動いたなら、逃げられないように後頭部を掴んだ後、舌を刺しこんで
ピーツするまでピーツしたのにな！

そして今、2人が戦っているのは何となくわかる。

それも相当に苦戦しているのを。

ならパートナーとして、私だけが寝てるわけにはいかない。

両腕の感覚はほぼないが、幸いにも両足は奇跡的に折れてすらいない。

「あ……あ……」

なら動ける。

やけにスローに動くモノクロの世界でゆっくりと銀頭に近づいていく。

やがてそばまで辿り着き、銀頭の身体の一部を噛みちぎる。

美味しい

いきなり足元(?)に発生した痛みに驚いたのか、私の方を振り向く銀頭。

気にせず食べ続ける私。

極光ほどではないが、収束した光弾が私に向けて放たれる。

しゃく

それを手で掴み、口に運ぶ。

炭酸飲料みたいに口の中で弾けるような食感だ。

? 急に味が良くなった。

思わず食事のペースが上がる。

すると更に味が良くなっていく。

自らの体に当たることも厭わず、極光が放たれる。

しゃく

強炭酸。

更に味が良くなった。

銀頭は狂ったかのように、私に向けて極光を放ち続ける。

しゃく、しゃく、しゃく……

ああ、なるほど。

怯えているのか。

怯え、恐怖し、絶望した時が、最も味が良いときかもしれない。

「音緒! 下がれ!」

ハジメが崩した岩盤を銀頭の上に落とし、更に錬成でまるで溶鉱炉のように銀頭を閉

じ込めた。

アイテムポーチを投げ入れたそこに、ユエが蒼天を叩き込み、銀頭を融解させていく。更にアイテムポーチの中の爆薬の類が連鎖的に爆発、防御を超えて大ダメージを与える。

銀頭は脱出しようと暴れるも、壊した先から錬成により修復されていくので、逃げ出すことができないまま焼け死んだ。

……実は8つ首の八岐大蛇でした！　なんてことはなく、完全に事切れたようだ。

それを確認したあと、全員ぶっ倒れた。

流石にもう無理……

ついに食べられた（意味深）なハジメ～1章終了とおまけの5話

目が覚めたらベットのの上だった。

「……ハジメ！ ユエー！」

沈み込むような柔らかさに微睡んでいたが、2人のことを思い出して跳ねるように起き上がる。

「……………」

声が聞こえたので横を見ると、そこには素っ裸のハジメと、ハジメの右手を太腿に挟み込みながら眠る素っ裸のユエがいた。

今更ながら私自身も素っ裸だった。

とりあえずハジメの太腿に足を絡ませ、残った左腕に抱きついて二度寝することにした。

く
く
く
く
く
く
く
く
く
く

「!? アバババババババババ」

突然体が感電したことに驚き、目が覚める。

体を痺れさせながら目を開くと、ハジメがいた。

「……ハジメ？」

「おう。ハジメさんだ。ねぼすけども、目は覚め……」

「ハジメ！」

「!?」

おっと、思わず2人がかりで押し倒してしまった。

って、あれ？ 視野が狭くなったのかな？

左側にいるはずのユエが見えない。

くユエ事情説明中く

ここは反逆者の住処で、先に回復したユエが私たちに神水を飲ませている間に力尽きたと。

視野が狭いのは、あの時の極光で私の左目が蒸発してしまったのだとか。

流石に欠損部位は神水では治せないらしい……ハジメの左腕を見ればわかるけど。

ダンジョンも攻略し終え、正しく据え膳のハジメを美味しくいただくこうとユエと共に

襲おうとしたら逃げられた。

むむ。しかし、いつでもチャンスはある。

くくくくくくくくくくくくくくくく

というわけで反逆者の住処を探索することに。

ユエはカッターシャツ1枚で、私はハジメのTシャツのみ。

来てた服は極光で消しとばされたからね、仕方ないね（棒）

ベツトルームの外に出ると、そこには太陽が浮かんでいた。

と思ったが、円錐形の物体に浮かんだ球体であり、本物ではなかった。

夜になると月に変わるとか。

他にも滝、畑、家畜小屋……さまざまな木が生えた林のようなものまで。

私たちは畑とは逆方向にある、ベツトルームと隣接する別の建物へと向かう。

開かない扉がいくつもあるなか奥まで行くと、大きな浴槽があった。

近くにあるマールライオンもどきに魔力を流し込むと、ドバーツと温水が噴き出し始めた。

2階には書斎などがあつたがスルー。

3階の奥の部屋には大きな精緻かつ繊細な魔法陣と、豪華な椅子に座つた黒ローブを

着た白骨死体が。

ハジメが魔方陣に踏み込むと、ピカーッと光る。

すると白骨死体と同じ黒ローブを着た男が現れた。

説明が長いのでカット

つまり反逆者は、狂った神から人類を救おうと戦った解放者なんだよ!!

な、なんだってー!?

というわけで神代魔法である生成魔法をゲット。

鉱石に魔法を付与するして、特殊効果を持った鉱石を生成できるんだとか。

錬成師であるハジメが使えば、アーティファクトを量産できそうだ。

オスカー・オルクスの白骨死体は畑の側に埋めて、墓を作った。

流石に死後時間が経ち過ぎていて、技能を得ることは出来なかった。

その後は書齋を漁って出入り口が書かれた設計図や、神代魔法を得られる他の迷宮の名前が書かれていた。

~~~~~

さて、今はハジメが一人で風呂に入っている。

1人で入ると主張していたが、知ったことではない。

一糸まとわぬユエと2人で、湯船に浸かるハジメの両隣に座り込む。

「……2人とも、俺1人で入るって言ったよな？」

「……だが断る」「フリですねわかります」

「……せめて前を隠せ。タオル沢山あつたらろ」

「むしろ見て……えい」

抱きつく。

「あ、あたってるんだが？」

「当ててんのよ」

もう我慢の限界。

「ええい、こんな風呂にいられるか！ 俺は上がるからな！」

「逃がさない」

「ちよ、まで、あつ、アツーーーーー!!!」

その後、何があつたのかは読者の想像にお任せする。

とりあえず、凄かったとだけ。

~~~~~


ハジメテを3ピーツで失い、いろいろとハジメが枯れ果てたある夜から2ヶ月経つた。

まさか見た目はロリなユエに、あんなテクニックがあつただなんて……

「……ハジメ、気持ちいい？」

「ん〜、気持ちいいぞ〜」

「こっちはどう？」

「あ〜、それもいいな〜」

「もつと……気持ちよくしてあげる……」

真昼間からまた盛つてると思った？

残念、ただのマツサージだ。

宝物庫で見つけたオスカー作の義手のアーティファクト。

それを改造したハジメは、それを新たな左腕にした。

なので義手と体が馴染むように、定期的にマツサージをしているのだ。

義手に用いられていた擬似神経、それを元に私の左目も復活した。

生成魔法で先読みと魔力感知、を付与した、文字通り魔眼だ。

そしてこれが、現在のステータス。

新川音緒 17歳 女 レベル：???

天職：健啖家

筋力：15070

体力：12680

耐性：13070

敏捷：14010

魔力：14970

魔耐：14970

技能：錬成〔+精密錬成〕・消化吸收〔+魔力捕食〕〔+無機捕食〕・魔力操作〔+魔力
 放射〕〔+魔力圧縮〕〔+遠隔操作〕〔+属性変化〕・胃酸強化・纏雷・氷結・毒物生成〔+
 麻痺鱗粉〕〔+神経支配〕・天歩〔+空力〕〔+縮地〕〔+豪脚〕〔+瞬光〕・風爪・夜目・遠
 見・気配感知〔+特定感知〕・魔力感知〔+特定感知〕・熱源感知〔+特定感知〕・気配遮
 断〔+幻踏〕・先読・環境適応〔+状態異常耐性〕・金剛〔+白熱〕〔+炸裂装甲〕・豪腕・
 威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換〔+体力〕〔+治癒力〕・限界突破・生成魔
 法・言語理解

あの時極光を食べる事ができたのは、「魔力捕食」が原因だったのではないかというのが、私達の考えだ。

しかし、より重要なのはもう一つの技能、「無機捕食」だ。

簡単に言えば、無機物が食べられる。

つまりこのダンジョンに溢れる、多種多様な鉱石を食べて能力を得られる。

タウル鉱石と燃焼石を大量に食べた結果、高温状態で耐久が上がる「白熱」と、敵の直接攻撃に反応して爆発を起こす「炸裂装甲」を獲得した。

他の鉱石はまだ摂取量が足りてないからか、能力を得られていない。

せっかく集めた鉱石を目の前でバリポリと食べられ、ハジメは枕を濡らした。

さらに武器も新調した。

ヒュドラの骨から作った槍を、宝物庫から発見された世界1の硬度を持つというアザンチウム鉱石でコーティングした。

完成した瞬間、槍が銀色に染まったのには驚いたが、何故か物凄く手に馴染む。

残りの6つの頭から取れた骨からも作ったが、それぞれの色に自動で染まった。

魔力を流しこむと、生前のように良く動く。

しかしいつでも槍を7つも抱えるのは難しい……というか無理なので、メインとして

使うことにした赤色と青色以外は私の宝物庫にしまつてある。

ちなみにここでのいう宝物庫とは、指輪型のアーティファクトだ。

●次元ポケットのようなものだと思えばいい。

さて、割と前から考えていたのだが、私にはとある課題がある。

ユエやハジメにはあつて、私にはないもの……そう、高火力の範囲攻撃だ。

ユエには魔法、ハジメにはシューラーゲンや手榴弾という範囲攻撃がある。

私には槍の間合いより広い攻撃をする手段が、使い切りの槍投しかないのだ。

それも威力、範囲、貫通力のどれをとつてもハジメのドンナーにさえ劣る。

そこで私は考えた。

瞬光を使ってハジメを襲う時も、仕立てたメイド服でユエとご奉仕（意味深）する時

も……いや、この時は考えてなかつたか？

と、とりあえず、寝る間も惜しんで考え続けていた。

そうして完成したのが、こちらになります。

魔力放射＋属性変化＋纏雷。

打ち出した魔力に火という属性を与え、更に雷を纏わせて薙ぎ払う。

……中距離技じゃないか!?

そのほか、ハジメが神結晶をあしらったアクセサリ一式を私とユエにくれた。

2人して思わず「プロポーズ？」と聞いてしまったのは仕方ない事だと思う。

実際には、魔晶石シリーズと名付けられた外付け魔力タンクなのだとか。

そして10日後、遂に地上に出た。

その時の俺が守る宣言は、やはりプロポーズなのではないだろうか？

これから旅に出るというのに不謹慎かもしれないが、私いま、幸せです。

~~~~~

とあるクラスメイト（男）。

死んだのが無能のあいっつらで良かったと嗤う王国の奴ら。

あの時あの2人は俺らを、明らかに足手まといになってしまった奴らをベヒモスから庇って戦っていたんだぞ？

もしあの2人がいなければ、半分……いや、確実に全滅していただろう。

天<sup>馬</sup>之河<sup>鹿</sup>は何を思ったのか、勝ち目のないベヒモスに向かっていったし、その周りの前衛組も一緒に殆どがベヒモスに向かっていた。

皮肉な事に、あの騒動を引き起こした檜<sup>クズ</sup>山<sup>ズ</sup>がベヒモスから逃げ、トラウムソルジャーと戦っていたからこそ持ったようなものだ。

それでも南雲が馬鹿をこっちに連れてくるまでに死にかけた奴はいたし、あの2人がいなければ死んでいた奴だっていた。

前衛組ではどうやってもベヒモスには勝てない以上、消耗戦になつてベヒモスを抑えられなくなり、全滅。

そのお礼があれか。

1 発だけなら誤射、事故だったと思えた……いや、思い込もうとしたかもしれない。

白崎さんに投げられた南雲を弾き飛ばすような2発目。

更に、南雲をあの人ごと仕留めようとした3発目。

俺は崖から飛び降りようとした白崎さんを咄嗟に押さえ込み……気づけばオルクス大迷宮の外にいた。

俺は魂が抜けたように虚空を見ながらついてきていたらしい。

メルドさんに気絶させられた白崎を、少し羨みながらその日は眠りについた。

さっきのはその翌日の出来事だ。

その時は俺がキレて手を出すよりも早く、馬鹿がキレて文句を言ったからなんとか耐えられた……が、馬鹿はやはり馬鹿であった。

あの場を生きて帰れたのはあの2人のおかげだというのに、まるで自分たちは懸命に戦ったのに自分で何かをしてドジって死んだとも取れる説明だった。

誰があの人たちを落としたのかの調査は、ついぞ行われなかった。

しばらく後、元凶であるクズが馬鹿を利用して謝罪し、それを許した時点で、この国とクラスメイトに期待をする事を辞めた。

夜間に1人で魔物のいる森に入り、技能とステータスを向上させ続ける日々が続いた。

白崎さんと八重樫さんはあの2人の生存を祈りつつ、オルクス大迷宮を奥へ奥へと進んでいる。

俺ももつと強くならないと。

そんなことを考えていると、ドスンドスンと大きな足音を立てながら恐竜のような魔物が、俺を食おうと新たに現れた。

くくくくくくくくくくくくくくくく

とあるクラスメイト(女)。

どうも、とあるクラスメイト(女)こと中村 恵理です。

僕と音緒は友達……ではなくて、なんだろう……共犯者？

同類？

まあ、信用はしてるけど、信頼はしていないような関係です。

こつちに来る前、僕がいつもと違って光輝くんと一緒にいなかった時に話しかけられたんだっけ。

それまでずっと一緒にいた、光輝くんにまわりつくどのゴミにも気づかれていなかったはずの僕の擬態が、始めて見破られた時はびっくりした。

脅迫でもされるのかと思っただけどそんなことはなく、その日から僕たちは、お互い利用し合いながら生活していた。

といつても、積極的に関わることはほとんどなかったんだけど。

光輝くんにまわりつくゴミを1人分受け持つてもくれていたし、上手いこと僕と光輝くんが2人きりになる瞬間を作ってくれたりもした。

……あれ、そう考えると結構恩があるのかな？

まあ、あんなのでも死んだんだったらこき使つてやろうと思ひ、残留思念だけを呼び出す降霊術を試したけれど、召喚できなかつた。

つまり生きている。

光輝くんは音緒の相手……南雲だっけ？……が死んだと思ひ、ゴミを励まそうとして近づいている。

全く、光輝くんはしょうがないなあ。

僕が止めないと、ゴミを放つておけずに集めちゃうんだから、



あ、そうだ。

最後に僕の便利なお友達パシリになってくれた、彼らについて紹介します。

1人は檜山 大介。

あの場で最初と次の2発は彼が撃ちました。

もう1人は近藤 礼一。

最後の1発を撃ったのが彼です。

あの時この2人が噛いながら、こっそり魔法を操作していた事に気付いたので、近藤の方はさつくり殺して縛魂と名付けた魔法でお人形になってもらった。

友人じゃないけど、都合のいい相手を消されて私も意外とプツンきてたみたい。

檜山は性根がだいぶアレだから、追い込まれた状態で近藤がやると言えば、これは近藤が始めたことと言いつつながらなんだってしてくれる。

実際に殺してるのは自分なのにねー。

あー、早く光輝くんを、僕だけを見て僕の望む通りに動く、僕だけの光輝くんにしたいなー。

## 2章

### 第2章に入った6話。ざっくりとフェアベルゲンまで

魔法陣を使つて久しぶりに外に出たかと思えば、真つ暗な洞窟の中だった。

「なんでやねん」

ハジメはキヤパオーバーすると関西弁になる。

私ももうちよつとこう……感動的ななにかがあるのではないかと期待していたのに。

「……秘密の通路、隠すのが普通」

ユエの慰めるような推論が心に刺さる……

いくつかの封印された扉を超え、ようやく日の光が見えた。

……ここ数ヶ月だけでも、ものすごく懐かしい。

300年もこの光を求めていたユエ。

お互い顔を見合わせて笑い、駆け出した。

そこは魔法が使えず、強力な魔物が云々。

つまり、ここが「ライセン大峽谷」だということだ！

「よっしゃあああー!!」戻ってきたぞ、この野郎おおー!!」

「おー!!」

「んっー!!」

3人で抱き合い、ハジメを中心にグルグル回る。

私はユエほど小柄ではないが、抱きかかえられた状態で。

地面のちよつとした出っ張りに引つかかかって転んだりしながら、しばらく笑い続けていた。

気づけば魔物に囲まれていた。

「はあく、全く無粋なヤツらだな。……確かここって魔法使えないんだっけ?」

「……分解される。でも力づくでいく」

なるほど。ゲームみたいに魔法自体が使えないというわけではなく、使おうとし

たら阻害されるような仕組みなのか。

莫大な内在魔力を持ち、更に魔晶石シリーズという外付けタンクがあるからこそできる芸当らしい。

「なら私がやる。2人も、下がってて」

ユエの魔法は効率が悪いし、ハジメの武器は一応、消耗品だ。

それに

「赤色」

この槍を通して魔力を圧縮放出するようなイメージで魔力を使うと、槍の属性のビームっぽいのが出る。

槍に魔力を流し込んで発動するだけなら、魔力分解の作用を受けないらしい。

ただ、発射したあとは一気に分解された。

射程は5mほど、十分。

~~~~~

「あつけない」

5分後、あたりは魔物の死体で溢れていた。

この辺りの魔物は強いと聞いていたが、奈落の魔物は比較にならない程に強かったらしい。

あのウサギを1匹ここに放てば、全滅させられるんじゃないだろうか？

ハジメの魔力駆動2輪に3人で乗り、樹海の方を目指して走る。

ちなみにユエ、ハジメ、私という風に、ハジメを挟み込むように乗っている。

走行中にも魔物は寄ってくるのでハジメが片付けているのだが、時折耳や首をはむつとすると狙いがブレる。

それでも外さないハジメは凄いの思いながら、ユエと一緒にむはむ……

「ええい、やめんか！」

「ええー……」

イチヤイチヤしながら進んでいると、前の方で他の魔物より少しだけ強そうな魔物が、ウサミミ少女を追いかけていた。

かつての恐竜の頭を2つにした感じだ。

「……兎人族？」

「なんでこんなところに？」

「こんな処刑方法があったような……」

「悪ウサギ……？」

「だずげでぐだざぐい！ ひっー、死んじやう！ 死んじやうよお！ だずけてえ、

おねがいしますう〜！」

魔物に弾き飛ばされ、滂沱のような涙で顔をぐしゃぐしゃにしたウサミミ少女がこちらに参りまーす。

ハジメ、魔力駆動2輪を停車しまーす。

そしてその場でクルッとターンし、逆方向に走り始めた。

「関わらない方向で」

容赦なく纏雷を叩き込んだ。

ウザウサギは哀れ、コゲウサギに。

その場にコゲウサギを放置し、魔力駆動2輪で駆け出そうとすれば、ゾンビウサギとなつてハジメの足を掴む。

「に、にがじませんよ〜」

……こわつ。

「……不気味」

「うう〜何ですか！ さつきから、ちよつと酷すぎると思っています！

断固抗議しま

すよ！ お詫びに家族を助けて下さい！」

怒りながらも要求を突きつけてくるあたり、存外余裕があるようだ。

コゲウサギのくせに、コゲウサギのくせに！

「つたく、何なんだよ……取り敢えず話聞いてやるから離せ。つてさり気なく俺の外套で顔を拭くな！」

折れたハジメにパーつと笑顔を見せながら、ハジメの外套で顔を拭くウサギ。

やはりウザウサギ、ハジメの肘鉄をくらつた。

「ま、また殴りましたね！ 父様にも殴られたことないのに！ よく私のような美

少女を、そうポンポンと……もしや殿方同士の恋愛にご興味が……？ そうでツあふ

んツ!？」

「誰がホモだ、ウザウサギ。それに、お前よりレベルの高い美少女2人が俺のすぐとなりにいるだろうが」

ンンツ!

唐突な御褒美は反則だと思えます。

ちなみに今のユエの格好はかつての痴女紛いではなく、ちゃんと綺麗な物になっている。

私の格好は悩みに悩んだ結果、クラシカルなメイド服。

格好に似合わない槍には、ちよつとした魔法を付与した鉱石を使って作ったモツプが、刃先を覆うように取り付けられている。

魔物のお掃除虚殺も夜伽もできる、ハジメ専用のメイドです。

でも、何か神秘的なものすら感じる美少女ではある。

性格がだいぶアレなだけで。

「で、でも! 胸なら私が勝ってます! そっち女の子はペツタンコじやないですか!」

ペツタンコじやないですか---

ペツタンコじやないですか---

ペツタンコじやないですか---

……お祈りは済ませた？

……謝つたら許してくれたり

……

死にたくなあい！ 死にたくなあい！

「嵐帝」

アッーアッー!!

ウザウサギは月まで飛んだ。

そして今も、ウザウサギは月で餅をつき続けているのです。

その姿が満月の夜、月に投影されているのです……

死んでませんよお……

しぶといウサギだ。

その後、ユエがハジメが巨乳派か聞くが、その問いに対して相手次第と答えたハジメはヘタレだと思いました。

別に巨乳派でも貧乳派でも、私たちのハジメへの気持ちは変わらないのに。

~~~~~

それはそうと、なんだかんだでウザウサギの家族も助けることになった。

というか、魔物に襲われていた残念ウサギの家族も助けた後だ。

彼女と家族の事情？ カットですよ、カット。

ただでさえ今回、原作コピペ過剰で消されないか不安なのに、そこまでやったら処分される……私は一体何を考えているんだろうか？

条件としてハルツィナ大樹海に着いた後、大樹の根元まで案内することを要求した。要求を聞き入れたウサミミ42人を引き連れ、ライセン大峽谷を進む。

時折襲ってくる魔物は、ハジメの弾丸か私の槍で貫かれるかで、業務的に処理されている。

そういえばあの誠に誠が残念なウサギは、未来視という固有魔法を持っているらしい。

……どこか体の一部でいいので、食べさせてもらえないだろうか？

「おいおい、まじかよ。生き残ってやがったのか」

……ん？

気づけばどうやらライセン大峽谷を抜けてたらしい。

ハジメが誰かに絡まれているようだ。

「小隊長！ 白髪の兎人もいますよ！ 隊長が欲しがってましたよね？」

「おお、ますますツイテルな。年寄りには別にいいが、あれは絶対殺すなよ？」  
は……なるほど、なるほど。

「そつちの嬢ちゃんたち、えらい別嬪じゃねえか。てめえの四肢を切り落とした後、目の前で犯して、奴隷商に売っぱらってやるよ」

ゴミだな。

ゴミは燃やして、ポイツと捨てないかね。

ドパンツ！

ハジメの銃声を合図に、私も飛び出す。

ゴミはあと29個。

真つ先に1番遠くにあったゴミの後ろに回り込み、モップで頭を叩き潰す。

あと28個。

ドパアアンツ！

1つの銃声なのに、6つの頭が吹き飛んだ。

私はモップに内蔵された槍を引き抜き、魔力を流し込んで横薙ぎに振るう。

4個燃えた。

あと18個。

ハジメが放り投げた破片手榴弾が爆発し、残り10個。

私が8個燃やして、残り2個。

「うん、やっぱり、人間相手だったら纏雷はいらないな。通常弾と炸薬だけで十分だ。燃焼石ってホント便利だわ」

ハジメは新装備の試し打ちが出来てご満悦の様。

さて、1個はハジメが色々聞くみたいなので放置して、もう1個のゴミに顔を向ける。  
「た、頼む！ 殺さないでくれ！ な、何でもするから！」

怯えているようだ。

前から思っていたのだが、殺されかけてる時の何でもするから！ つてセリフ、殺す側からすればじゃあ死んで？ と言われる気しかしないのだが、気のせいなんだろうか？

とりあえずなんでもしてくるそうなので、ステータスプレートを提出させる。

ふむふむ……やっぱり普通の人のステータスはこれくらいなのか。

技能の数も少ない。クラスメイトは本当にチートらしい。

めぼしい技能もないし、ステータスも高くない。

掘り出し物があるかと思つたが、ゴミはやはりゴミ。

着火して掃除が終わつた。

残つた死体は、ユエが魔法で谷底に落として処理しました。

穏和な種族で有名なハウリア達には刺激が強かったらしくハジメに苦言を呈し、ユエ説教されたりしていた。

さつきのゴミの山が持っていた馬を貰い、ハウリア達を乗せて進む。

私たちの身の上話を聞き、残念ウサギが仲間になるとか言い始めた。

クーリングオフの手続きはどこでできますか？

という私のジョークはスルーされ、ハジメがNoと答える理由を述べる。

残念ウサギに足りないものは、それは！

情熱・思想・理念・頭脳・気品・優雅さ・勤勉さ！そしてなによりもオオオオオオオオ

!!

強さが足りない!!

私たちが攻略しようとしているのは、解放者たちが残した七大迷宮。

奈落の魔物どころか、おそらくベヒモス以下の双頭恐竜に勝てない時点で、瞬殺されるのがほぼ確定している。

断られてから何か考え込む残念ウサギをよそに、ついに【ハルツイナ大樹海】にたどり着いた。

心配を消していざ……

「お前達……何故人間という！ 種族と族名を名乗れ！」

と思つたら、筋肉隆々の虎の獣人が現れた。

問答無用で襲いかかろうとしてきたので、ハジメがいつものようにドパンツと一発ぶちかます……と思いきや、威嚇射撃だった。

威圧と殺意で虎獣人を脅は……交渉を行い、大樹の下に向かう許可を取れるかどうかを確認させることになった。

待っている間に調子に乗った残念ウサギが私とユエにダツドリー・デス・ドロップを叩き込まれたり、関節技をかけられたりしている時に、急速に近づいてくる気配を感知。

思わず関節技をかける手足に力が入る。

残念ウサギの関節は悲鳴をあげた。

どこで解放者について知つたなどを聞かれ、なんだかんだで獣人……亜人たちの国、フェアベルゲンへの入国と滞在を許可された。

エルフがいる以上、獣人ケモミミの国とは呼べなかった。

ちなみに今は霧が濃いかで大樹の根元には行けないらしい。

亜人なら誰でも知っていることで、それを忘れていた残念ウサギの群れは……

「嵐帝」

アッーーーーー!!!

~~~~~

というわけでフェアベルゲンに到着。

道中に設置してあった魔物避けと霧避けの効果を持つフェアドレン水晶という鉱石の原産地について聞いたが、答えてはもらえなかった。

フェアベルゲンの街並みは、思わず呆然とするほどには綺麗だった。

あの樹の枝が絡み合って出来た空中回廊は、一体どうやって作ったんだろうか？

やはり、木の成長を操作するような魔法が……？

そんな疑問を抱きつつも、エルフ……森人族の長老と話をしていると、クマミミの乱入者が現れた。

「アルフレリック……貴様、どういふつもりだ！　なぜ人間を招き入れた？　こい

つら兎人族もだ。忌み子にこの地を踏ませるなど……返答によつては、長老会議にて貴様に処分を下すことになるぞ」

こいつも筋肉隆々である。

あれか？　元になる動物のサイズに合わせて、筋肉隆々になる仕様なのか？

それはそうと、階下にいる残念ウサギ族たちが多数の気配に囲まれているのを感じた。

階下に降りてみると、ドワーフっぽいのが鳥、熊、虎、狐の獣人まで。

そのうちの1人が残念ウサギ筆頭に殴りかかったので、モップを投げて牽制してく。

「ハジメ、私は階下のをどうにかしとく。こっちはよろしく」

そう言つて先に1人、階段を下りる。

たといえ残念ウサギであろうと、契約は契約。

守ると言つた以上、守らなければ。

「というわけで、この最弱残念ウサギたちをどうこうしたいなら私が相手をする。大丈夫、万が一にも殺さないよう、割れ物に触れるくらいの気持ちで手加減してあげるから」

上等だ！ と威勢良く飛びかかってきたトラミミ。

その拳を指一本で受け止めて、お返しに1発強めにボディブローを入れてやった。

「ガ、ガアアアアアアアアア!？」

ただし、魔力変換で光属性を付与して身体の内部に直接叩き込むというオマケ付きで。

一応身体は無事……あの激痛は死んだ方が幸せかもしれないけど。

ほら、ゴミに対して捨てないどころか壊さないように扱うなんて、私にしては優しいでしょ？

「次は誰？」

……誰も名乗りをあげない。

この虎は人望があまりないようだ。

そう思っていると、さっきのクマミミ乱入者が外に吹き飛ばされていくのが見えた。

さらにハジメの威圧＋殺気でへし折れたらしい。

残念ウサギ族を取り囲んでいた奴らは逃げ出した。

~~~~~

交渉の結果、残念ウサギ族はハジメの奴隷になり、フエアベルゲンへの立ち入りを禁止されたようだ。

まあ、奈落で暮らしてた時なら野宿が当たり前だったからそこはどうでもいい。

ただ、ハジメのカッコいいシーンを見逃したのが辛い。

## 狂育（誤字ではない）パパのハジメさん（7話）

「さて、お前等には戦闘訓練を受けてもらおうと思う」

フェアベルゲンから追い出されたので拠点を作ったあと、残念ウサギ族の前でハジメが宣言する。

拠点といっても、こつそりくすね……貫ったフェアドレン水晶を設置しただけなのだが。

「どうせ、これから十日間は大樹へはたどり着けないんだろ？　ならその間の時間を

有効活用して、軟弱で脆弱で負け犬根性が染み付いたお前等を一端の戦闘技能者に育て上げようと思ってな」

つまり自衛能力を授けるといふことだ。

この後私たちがいなくなれば、害意に対して逃げ隠れることしかできない、戦闘能力皆無な残念ウサギ族は再び窮地に陥る。

隠れ家も失った彼らは、このままではいずれ滅ぶということだ。

しかし兎人族は弱いという常識に囚われた残念ウサギ族たちは、どう頑張っても自分たちには無理だと卑屈になる。

そこでハジメは、私と自身の出自の話をした。

つまりステータスが低すぎたあの頃の話だ。

出来なければ死が当たり前の環境で、ハジメと私は強くなった。

つまりは死ぬ気でやれば、なんとかなるということだ。

そうして残念ウサギ族たちは訓練を受けることを志願した。

魔力を持つ残念ウサギ筆頭はユエが、残りのほとんどはハジメと私が担当することになった。

~~~~~

残念ウサギ族は私たちの想像以上に残念だった。

各々ハジメが錬成の練習で作った小太刀を手にし、基本的な扱い方を私が教え、弱い魔物を狩るように指示した。

その結果が……

「ああ、どうか罪深い私を許してくれえ〜」

やら

「ごめんなさいっ！　ごめんなさいっ！

それでも私はやるしかないの！」

とか

「ふっ、これが刃を向けた私への罰というわけか……当然の結果だな……」
ハウリアはあまりに残念すぎる一族だった。

あんまり怒らないことに定評のある私たちにも、流石に青筋ができる。

「お花さんが〜」

「虫達にも気を使います」

……………

ゆっくり近づき、彼らが気にしていた虫を踏み潰し、踏み躪り、燃やし尽くす。

「む、虫さーん！」という声が聞こえるが、無視だ無視。

「ああ、よくわかった。よくわかりましたともさ。俺が甘かった。俺の責任だ。お前等という種族を見誤った俺の落ち度だ。ハハ、まさか生死がかかった瀬戸際でお花さんだの虫達だのに気を遣うとは……てめえらは戦闘技術とか実戦経験とかそれ以前の問題だ。もっと早くに気がつくべきだったよ。自分の未熟に腹が立つ……フッフ」

「ハ、ハジメ殿？　音緒殿？」

恐る恐る私とハジメに話しかけたのは族長であるカム。

ドパンツ！

返答は非致死性のゴム弾だった。

私は気絶して白目を向いているカムに近づき、腹に蹴りを入れて叩き起こした。

「貴様らは薄汚いピッター共だ。この先、ピッターされたくなかつたら死に物狂いで魔物を殺せ！　今後、花だの虫だのに僅かでも気を逸らしてみろ！　貴様ら全員

ピッターしてやる！　わかつたら、さっさと魔物を狩りに行け！　このピッター共が！」

ハジメ軍曹、降臨。

その突然の暴言に残念ウサギ族は固まってしまった。

ドパンツ！　ドパンツ！　ドパンツ！　ドパンツ！……

そんな彼らを襲うハジメのゴム弾の雨霰。

蜘蛛の子を散らすように、散っていく残念ウサギ族。

「ハジメ兄ちゃん！　一体どうしたの!?　何でこんなことするの!?!」

フェアベルゲンに来るまでにハジメに助けられ、懐いていた少年がハジメに縋り付く。

美男美女が多い残念ウサギ族だけあって容姿も整っており、涙目で懇願する彼の姿は、大抵の人は気を許してしまうことだろう。

ハジメの返答はゴム弾だった。

それも少年自身を狙うのではなく、周りに咲いている花を狙って。

「黙れ、クソガキ。いいか？　お前が無駄口を叩く度に周囲の花を散らしていく。花

に気を遣っても、花を愛でてでも散らしてく。何もしなくても散らしていく。嫌なら、一体でも多くの魔物を殺してこい！」

そういつてさらに撃ち、花を散らしていくハジメ。

少年は泣きながら樹海に消えた。

「ね、音緒さん！　こんなの酷すぎます！　ハジメさんを止めてください！」

私の方には少女が来た。

ふむ……

「君はお花さんが好きなんだね」

そう言いながら、慰めるように頭を撫でる。

うむ、ウサミミがモッフモッフしておるわ。

「そうです！　だからっ！」

「でもそれは、家族のみんななよりも大事なものの？」

「そ、それは……」

頭を掴み、しっかりと目と目を合わせ、もう一度問いかける。

「お花さんや虫さんの命と家族の命、どっちの方が大事？」

「……家族、です」

「なら、あなたはどうしなきゃいけない？」

「でも……」

「命を奪うというには悪いことじゃないの。生きるためには、他者の命を奪わないといけないの」

「いきるため……いのちをうばう……」

「今まで貴方が食べ、糧にしてきた肉や野菜、果物たちもみんな、元々は生きていたの。私たちは自分たちが生き残るために彼らを殺す。それが生きるということ。弱いものは強いものに食べられ、殺される。私の国では弱肉強食っていうのよ。」

「いきのこるために……ころす……じゃくにくきようしよく……」

「なら、やるべき事はわかるよね？」

「樹海で、魔物を殺すこと……生きるため、強くなること！」

目を見開き、アハハハハハツ！ と笑顔で少女は樹海に消えた。

……ハジメ？　なんでそんな目で私を見るのかな？

闇系魔法無しで洗脳？　いやいや、洗脳なんてしてない。

ただ、世界の真実を教えただけよ。

~~~~~

なにかを賭けて勝負していたユエと残念ウサギが私達の元に戻ってきたとき、私たちは木の根元に座って瞑想していた。

なんかMPが回復する気がするんだよね。

そしてシアが身体強化に特化しており、ハジメの6割……つまりステータスでいうなら筋力：6000くらい出せるらしいということが判明した。

最大強化された勇者の二倍である。

それだけ強ければ、魔物くらいチョチョイのチョイだったのでは？　と思っていた

ら、残念ウサギがハジメに告白した。

……ユエー？　ちよつとお話をしましょー？

賭けに負けた結果、ユエはハジメと私を説得する側に回つたらしい。

でもまあ、ユエに傷を付けるというには楽な課題ではない。

それだけ想いが本気であるということなのだろう。

覚悟もある。

………しようがない。

私は許可しよう。

ハジメも告白に応えるかは別とだけ言い、同行を許可した。

「まずは毎朝、自作のハジメ讃歌を歌い……寝る前には毎日50ページのハジメポエム



を作成することがノルマ」

「はいですう！」

「ノルマに慣れてきて、ハジメマスターとしてある程度の実力が認められた場合、ハジメグッズの作製と交換、所有する権利が認められます」

「待ってユエさん、音緒さん。えっ、いつもそんなことしてたの？　　というかハジメ

グッズって何!？」

ハジメグッズはハジメグッズです。

そんな風に4人で騒いでいると、課題をクリアしたハウリア達が帰ってきた。

ウザウサギは会っていなかった、大変だったであろう10日間のことを話そうとカムに近づくが、寸前で雰囲気が違うことに気づいたようだ。

「ボス。音緒の姐御。お題の魔物、きっちり狩って来やしたぜ?」

「ボ、ボス?　　ね、音緒の姐御?　　と、父様?　　何だか口調が……:というか雰囲気

が……」

カムは娘のウザウサギをサラリとスルー。

私たちが出していた、チームで上位の魔物一体の狩りという課題をクリアした証である牙や爪をバラバラといくつも取り出した。

「……俺は一体でいいと言ったと思うんだが……」

「ええ、そうなんですけどね？　殺っている途中でお仲間がわらわら出てきやして……

生意気にも殺意を向けてきやがったので丁重にお出迎えしてやったんですよ」

元の温和で平和的な残念ウサギ族の面影が微塵もない。

ギラついた目と不敵な笑みを浮かべたまま、私たちに物騒な戦闘報告をする。

それを呆然と見ていたシアは一言

「……誰？」

~~~~~

「ど、どういうことですか!?　ハジメさん！　音緒さん！　父様達に一体何がっ

!?!」

「お、落ち着け！　ど、どういうことも何も……訓練の賜物だ……」

「……おかしなところはない」

「いやいや、何をどうすればこんな有様になるんですかっ!?　完全に別人じゃないで

すかっ!　ちよつと、目を逸らさないで下さい！　こっち見て!」

「……別に、大して変わってないだろ（でしょ）?」

「貴方達の目は節穴ですかっ!　見て下さい。彼なんて、さつきからナイフを見つめ

たままウツトリしているじゃないですか！ あっ、今、ナイフに「ジュリア」って呼びかけた！ ナイフに名前つけて愛でてますよっ！ 普通に怖いですよ〜！」

ウザウサギは、変わり果ててワイルドになったハウリア族に指をさしながら、私たちに事情説明を要求してきた。

ハジメはのらりくらりと政治家のように回避している。

「ウザウサギ、あれは……そう、残念ウサギ族からハウリア族に進化しただけ」

「進化も何も、私達は元々ハウリア族ですよー！」

ラチがあかないと判断したのか、ついに勇気を出してハウリア達に話しかける。

「父様！ みんな！ 一体何があったのです!? さっきから口を開けば恐ろしい

ことばかり……正気に戻って下さい！」

変わってしまった父親に縋り付くウザウサギ。

コレが演劇の舞台ならば、お涙頂戴な場面なのだろう。

そして娘の涙で、父親が正気に戻るといふ感動的なシーンに繋がるのだろう。

思わずカムも、残念ウサギ族だった頃のような温和な笑顔を浮かべる。

それに元に戻ったと安心するウザウサギ。

「何を言っているんだ、シア？ 私達は正気だ。ただ、この世の真理に目覚めただけ

さ。ボスと音緒の姐御のおかげでな」

現実是非情である。

プギヤーwww m9（ハハ）

「し、真理？ 何ですか、それは？」

「この世は弱肉強食。問題の九割は暴力で解決できる」

「やっぱり別人ですう〜！ 優しかった父様は、もう死んでしまったんですう〜、う

わあ〜ん！」

シヨックのあまり、ウザウサギは樹海に飛び込んでいった。

しかし、霧の中に消える直前で、霧の奥からきた小さな影とぶつかって尻餅をついてしまった。

小さな影は転倒せずに持ちこたえ、ウザウサギを起こすために手を差し出した。

「あつ、ありがとうございます」

「いや、気にしないでくれ、シアの姐御。男として当然のことをしたまでさ」

「あ、姐御？」

小さな影はハジメに懐いていたあの少年だった。

大きなクロスボウを担いでおり、ニヒルな笑みを浮かべている。

「ボス！ 音緒の姐御！ 手ぶらで失礼します！ 報告と上申したいことがあります！

ます！ 発言の許可を！」

「お、おう」

「許可する。話せ」

「はっ！ 課題の魔物を追跡中、完全武装した熊人族と虎人族の集団を発見しました。場所は、大樹へのルート。おそらく我々に対する待ち伏せかと愚考します！ 宜しければ、奴らの相手は我らハウリアにお任せ願えませんでしょうか！」

「あゝ、やつぱ来たか。即行で来るかと思ったが……なるほど、どうせなら目的を目の前にして叩き潰そうって腹か。なかなかどうして、いい性格してるじゃねえの。カムはどうだ？ こいつはこう言ってるけど」

所詮、この魔物程度に苦戦する程度の実力。

今のカム達、ハウリア族なら問題はないと思う。

「お任せ頂けるのなら是非。我らの力、奴らに何処まで通じるか……試してみたく思います。なくに、そうそう無様は見せやしませんよ」

「できるんだな？」

「肯定であります！」

最後の確認をするハジメに元気よく返事したのはあの少年だ。

そういえば、私が時々対応していた人達はどうなっているんだろうか？

そう思って探してみると……居た。

「敵はどうする!」

「「「殺せ!! 殺せ!! 殺せ!!」」」

「そうだ! 殺せ! お前達にはそれが出来る! 自らの手で生存の権利を獲得

しろ!」

「「「アイ!! アイサー!!」」」

「いい気迫だ! 俺からの命令は唯一つ! サーチ&デストロイ! 行け!!」

「「「「Y H A A A A A A A A!!」」」」

「うわあ〜ん! やっぱり私の家族はみんな死んでしまったですう〜!」

あー、うん。

ごめん、やり過ぎたかもしれない。

ほら、あの子……私にハジメを止めてって縋り付いてきた……確かネアちゃん?

なんかハイライトが行方不明になってるし。

なんか仕留めた獲物を見て、ウフフフ……って、なんか地上波では放送できないようなヤバイ顔して笑ってるし。

「今はバルトフェルドです。『必滅のバルトフェルド』これからはそう呼んでください」

少年は厨二病を拗らせてしまったらしい。

「……流石ハジメと音緒、人には出来ないことを平然とやってのける……闇系魔法も使わず、洗脳……すごい」

「正直、ちょっとやり過ぎたとは思ってる。反省も後悔もないけど」

それからしばらくの間、ウザウサギはユエの胸に頭を埋め……当てながら、シクシクと泣き続けていた。

割と本気で申し訳ないと思ったので、少しくらい名前で呼んであげようかと考えた
が、やっぱり辞めておいた。

蹂躪したり、探索したりの8話

私達を襲おうとしていた彼らの事情は割愛する。

あの熊と虎は、意外に人望がある奴だったんだなーとだけ。

「この程度かピーツ！野郎ども！」

「そのピーツ！は飾りかあ!？」

「これはないだろう!？　こんなの兎人族じゃないだろ！」

ピーツ！音が鳴り止むということを知らない。

撤退を進言した奴もいたが、熊人族のリーダーが逡巡している間に必滅のバル……な
んとか君に射抜かれていた。

虎人族のリーダーは今、ネアちゃんに真正面から斬り伏せられていた。

……なんであの子、小太刀じゃなくて太刀を持つてるの？

さつきまで、小太刀2刀流じゃなかったっけ？

「間合いが広くて高威力、今までの小太刀と同じくらいの斬れ味の武器はないか？　　って頼

まれたから作った。というか、もつとたくさんの武器を求めてきたぞ？　　棍とか槍と

か、ナイフや鉤縄まで」

その結果、虎人族のリーダーっぽい人……だけじゃなく、その周りの親衛隊っぽい奴らまで合わせて無双しているんですが、どう思います？

「……どうしてあんなったんだろうなって」

ハジメの調きよ……狂育の結果です。

私はちよつと助言したただけだから。

「ちよつと助言しただけ……？ あれが？」

「……2人とも今は黙って見る」

ユエに怒られました。

シヨボン。

そうしている間に戦い……蹂躪は佳境を超え、すでにリーダーの命が手のひらの上にある状態だった。

熊人族はカムのチームが、虎人族はネアちゃんのチームが担当している。

あれ？ ネアちゃんのチーム、私が助言した人ばかり？

「クツクツクツ、何か言い残すことはあるかね？ 最強種殿」

「ぬぐう……俺はどうなつてもいい。煮るなり焼くなり好きにしろ。だが、部下は俺が無理やり連れてきたのだ。見逃して欲しい」

「それなら俺もだ。俺はどうなつても良いから、部下たちは見逃してやってくれっ！」

そう言つて頭を下げ続ける熊と虎のリーダー2人。

「だが断る」

返答は頭に目掛けて投擲されたナイフだった。

「うお!!」

咄嗟に体を捻つて躲す熊リーダーと虎リーダー。

更に周りのハウリア達は投石などを行い始める。

呻くように声を絞り出し、問答無用の攻撃の理由を聞く熊と虎。

「なぜ? 貴様らは敵であろう? 殺すことにそれ以上の理由が必要か?」

「強いて言うなら、貴様らの命より家族の命の方が私にとって大切だから。家族を害する敵、だから殺す」

そこまでならまあ、許容範囲だったんだけどなあ……

「それに何より……貴様らの傲慢を打ち砕き、甦るのは楽しいのでなあ! 　ハハハハ

ハハ!」

ドパンツ!!

ハジメがカムがトドメを刺そうとしていたのを止め、私はネアちゃんの命を刈り取り
そんな形の鎖鎌を刃先を摘んで止めていた。

……こんなまで作つてたの?

「……………どういいうおつもりですか。ボス（音緒の姐御）」

「悪い悪い。つい間違えて撃つちまったよ。お前のその顔……………襲ってきた帝国兵とそっくりだったもんでな」

「私は生きるために殺せとは言った。でも、殺しを楽しめと言ったつもりはない」

「ッ!？」

やっぱり気づいてなかったらしい。

「……………初めての対人戦だ。今気づけたなら、もう大丈夫だろ」

私から言うことは特にない。

「おい……………あー、両種族のリーダー2人。今なら全員、もれなく見逃してやってもいいぞ。ただし、フェアベルゲンの長老共にこう伝える。『貸し一つ』ってな」

「……………っ！ わ、わかった……………」

「伝言はしつかりとな？ もし取り立てに行つた時、惚けでもしたら……………」

「その日がフェアベルゲンの最後だと思え」

「あ、あともう一つ。熊人族と虎人族の2種族がかりでも、ハウリア族に惨敗した事を周知しておいてね。自分達がやらかした馬鹿も……………そうじゃないと、被害が拡大するだけだし」

そうして奴らは去っていった。

……さて。

「今回は私とハジメが悪かった。短期間で仕上げるためとはいえ、少しやりすぎたと思う。すまなかつた」

ハジメと一緒に軽く頭を下げ謝る。

多分まだユエに泣きついてるシ……ウザウサギにも、謝っておかないと。

「ボ……ボスと音緒の姐御が謝った!」

「重傷者2名! 頭を打った模様!! 意識の混濁が見られる!!」

……ほう?

珍しく人が心配してやったというのに、そういう事言っちゃおう?

とりあえず、1発ずつブン殴る!

くくくくくくくくくくくくくくくく

そうして着きましたのは枯れている大樹の根元。

石碑があつて色々重要な事が書かれているのだが、カッター!

ハウリア達も旅に同行したいと言い始めもするが、それもカッターだ。

珍しく脅迫される側に回って慌てるハジメは可愛かつたです。

そして旅立ちの日にもかかわらず、ハウリア達にスルーされ続けたウザウサギは今、私の胸の中でシクシク泣いています。

よしよし、よく頑張ったね。えらいえらい……つとといった風に、子供をあやすように頭を撫でながら宥める。

……モフモフ。

しかし、私とハジメを魔物肉しか食べないプレデター扱いした事は許さん。

4人乗りは流石に狭いし、町まで鎖で繋いで引きずって行くのはどうだろうか？

何？ ウザウサギを奴隷だと思わせるため、ハジメお手製に特殊な首輪を着ける？

むむむ……私も着けて、ハジメの所有物って感じを演出するか？

いやでも、そしたらユエだけが奥さんという扱いに……！

くっ！　これが二律背反かつ！

「いや、人族の奴隷は違法だから」

~~~~~

遠くに小さな町が見える。

周囲には柵と堀があり、街道の先には木製の門、その側には小屋がある。

そろそろ向こうからもこちらがはつきり見えるくらいの距離になりそうなので、魔力駆動2輪から降り、徒歩に切り替える。

長距離高速移動が可能になるアーティファクトとか、面倒ごとの元だもの。

「止まってくれ。ステータスプレートを。あと、町に来た目的は？」

お仕事、お疲れ様です。

私とハジメはステータスプレートを取り出す。

「食料の補給がメインだ。旅の途中でな」

気のない声で相槌を打ちながら、門番の男は私たちのステータスプレートをチェックする。

「錬成師と健啖家？ チームの冒険者もつけず、よく無事に来れたな」

ステータスプレート隠蔽機能使用中です。

門番の男は、私達が戦闘職じゃないのに訝しんでいる。

「でもまあ、他に不審な点はないし、大丈夫だろ。そっちの2人は……」

「道中盗賊に襲撃されてな。こっちの子のは無くしちまったんだ。兎人族は……わかるだろ？」

「護衛だな。通つてよし」

フロント・ラット・スプリットの体勢のままムキッ！ つとなるウザウサギ。

まあ非戦闘職2人と幼気な少女とくれば、戦闘要員はウザウサギしかいないから……  
「おっと、そうだ。素材の換金場所って何処にある?」

「あん? あー……それなら、中央の道を真っ直ぐ行けば冒険者ギルドがある。店に直接持ち込むなら、ギルドで場所を聞け。簡単な町の地図をくれるから」

「おお、そいつは親切だな。ありがとよ」

ということ、ギルドに向かった私達。

道中、ハジメがウザウサギに俺が守るといふカッコいい台詞を。

そして調子に乗ってクネクネして妄言を叩き始めたので、ユエと一緒にサンドイッチ延髄斬りを叩き込んだ。

やはりウザウサギはウザウサギだ。

ギルドでは幸せ太りをしたのであろう、たいへん魅力的な笑顔のオバちゃんに対応してもらった。

この人……おそらく痩せれば美人だなっ!?

「あははは、嬉しい事を言ってくれるじゃないか」

……女の勘ってこえー。

結局、施設などの割引という特典につられて冒険者登録。

テンプレ的に高ランク(笑)な冒険者に絡まれ、叩き潰して一目置かれるようなイベ



ントもなく、奈落の素材を出して受付嬢が驚愕し、ギルド長登場！いきなり高ランク認定！受付嬢の目がハートに！　なんてテンプレを考えてそんなハジメをジト目で見つつ。

というか奈落の素材を出しても、なんの素材か理解されないと思う。

その後はオバちゃんから貰った、趣味で作ったらしい町の地図を元に宿へ向かった。

私、ユエ、ハジメの3人部屋とシア1人部屋にして、3人で夜の運動会(○)をするはずが、3人部屋を1つ借りて宝物庫から布団を出す事になった。

とりあえず風呂に乱入して……アイタツ！

ハジメにゲンコツを落とされた。

しかも1人だけ割と本気で。

くっ、ステータス差別反対！

「これくらいで叩かなきゃ、ダメージすらないだろ」

酷いっ！

風呂上がりのウザウサギ……いや、シアは凄かった。

「……あつ。すごい……なにこれ……」

あのユエが一瞬で骨抜きにされた。

「……っ！」

あのハジメが声を出すのを必死に耐えていた。

「きもちいい……きもち……いいっ」

私も何とか、襲いかかるのを自制しているような状態になってしまっている。

「お風呂に入った後のウサミミ……しゅぐいい……」

「尻尾も……モフモフふわふわ……」

「ユエさん、音緒さん。他の部屋に聞こえるから少し静かに」

そういえば、宿の娘の彼女は風呂の時も寝室の時も、私達を覗こうとしていた。

他人に憚ることなど何もない、見せつけてやろう！ と言ったら、風呂の時の2割

増しで叩かれ気絶させられた。

で、翌日。

ハジメはよく寝付けなかったようだ。

なんでだろうね？

私、気絶してたからわかんないやー。

ハジメは宿に残って、シアのための武器を作るようだ。

ユエとシアは一緒に買い物に出かけるらしい。

私も誘われたが……道中で食べ放題の店があったのを思い出し、そっちに行っておき

たいので別行動を申し出た。

これから7大迷宮を探索する予定がある以上、今後もしかしたら絶食する必要がある場所に行くかもしれない……まあ私だけなら最悪、石でも食ってれば良いんだけども。

結局、私がしっかりと人の手が入った料理をたくさん食べたいのだ。

ハジメのためのお土産も買ってこよう。

「……音緒さん、俺のメイドになってください!!」「……」

「お断りします」

外に出て食べ放題のお店を探していると、いきなり大勢のゴミに囲まれた。

邪魔なので誤解のしようがない簡潔な返答で切り捨てる。

「なら、なら力づくでも俺のものにしてやるう!」

そんなゴミの中でも、より救いようなないゴミが下劣な視線を向けて襲いかかって来た。

まるでオルクス大迷宮の……岩のゴリラのようだ。

つまりこのゴミは間違いなく女の敵で、周りで出遅れたと思ってそうな表情の奴らも全て敵。

「弁明っ! 無用ッ! 女の敵は無残に死ねッ!」

周りにいた人たちの顔が真っ青に染まっていく。

「……またの名を、変態撲滅ライダーキック」

(ゴミの股間が) 大爆発。(比喩ではない)

誰一人逃がさん。財布と股間だけ置いて逃げ。

そうして町の性犯罪者予備軍を減少させたあと、手術費として頂敬取したいたお金で食べ放題の店を渡り歩いた。

この日、この町のいくつか飲食店が潰れた。

それ以来飲食店経営者の間では、「店ごと喰らい潰す化け物」の噂が流れるのだった。

「ハジメ。お土産買ってきた。一緒に食べよう」

「おー。ちようどキリが良いし、飯にするか」

やったぜ。

~~~~~

「一撃 必殺! ですう!」

ズガンツ!!

「……邪魔」

ゴバツ!!

「うぜえ」

ドパンツ!!

「不味い」

もぐもぐ……

ここはライセン大峽谷。

かつては処刑場として使われていたとかなんとか。

カッツなので詳しく知りたい人は、原作へどうぞ

ライセン大峽谷のどこに大迷宮の入り口があるのかわからないので、見つからなければ大火山に向かう予定だ。

というわけで探索開始3日目、今日も野営する。

「ライセンの大迷宮、見つからないなあ」

「ん……」

「はい皆さん。食事ですよ」

シアの料理は美味しい。

「私家事全般得意なんで！

あつ、さつき捕まえたクルルー鳥も食べましょうね」

へクエ〜

ザクツ！　　ブシヤツ！

「(温厚な1族とは?)」

いやまあ、生きるための肉だから……

いや、魔物すら殺すのを躊躇していたあのハウリアだよ？

どうしてこうなった!?

野営中にシアが1人で花を摘みに行った時、事件は起こった。

なんとシアが見つけたお花畑(比喩表現)に、岩壁に書かれた文字を発見したのだ。

そこには女の子が書くような小さな丸文字で……言語理解は書体さえも理解できる

のか？

“おいでませ！　ミレディ・ライセンのドキワク大迷宮へ♪”

まあこう書いてあった。

その近くには

“アゲ☒?☒?☒?アゲ”

や

“か〜ら〜の〜?”

とか

“入り口は(?????)ノ 内緒!(爆)
“
みたいなのが書かれていた。

いったいいつの時代……ああ、かなり昔の方でしたね。

あまりにもここに来てくれる人が居なさすぎて、流行に乗り遅れたのだろう。
ハウリア並みの残念さだ。

ライセン大迷宮とミレディ・ライセンぶっ殺9話

前回、偶然シアが発見したライセン大峽谷にある大迷宮の手がかり。

それはあまりにも、もはや憐れみすら覚えるレベルでセンスが古かった。

「でも、入口らしい場所は見当たりませんか？　奥も行き止まりですし……」

あたりをペタペタ触りながら探索するシア。

まあ、本当にヤバイなら未来視が自動発動するよなと思っていたら、グルンと壁が回って中に入ってしまった……

アイエエエ！　ニンジャ!?　トーラスニンジャナンデ!?

こんなニンジャ屋敷を作る奴が、ニンジャじゃないはずがない!

常人である私達では……あ、私達、そもそも人類か怪しいんだった。

じゃあ平気かと、回転扉を通って中に入る。

すると中は真つ暗で、無数の風切り音と共に黒く塗り潰された矢が飛んで来た。

飛んで来た矢をキャッチ、そして他の矢に向けてリリース。

10回も繰り返せば、矢は収まった。

すると部屋の中の、石版が置かれた場所がライトアップされた。

“ビビった？　ねえ、ビビっちゃた？　チビってたりして、ニヤニヤ”
“それとも怪我した？　もしかして誰か死んじやった？　……ぶふっ”
と書いてある。

シアは後ろで矢に服だけを射抜かれたことで礫にされ、粗相をしていた。

哀れな……

「そう言えば花を摘みに行っている途中だったな……まあ、何だ。よくあることだつて……」

「ありませんよお！　　ううう、どうして先に済ませておかなかったのですかあ、過去のわたじい〜!!」

この大迷宮の入り口を見つけたからじゃない？

なんて軽口を言いながらも、ちゃんとシアを礫にしている矢を外していく。

いや、同じ女性としてちよつと……あまりにも……ね？

「……あれくらい何とかする。未熟者」

「面目ないですう〜。ぐすつ」

ようやく自由の身になり、着替えも済ませたシア。

ライトアップされている石版を見て、ドリユッケンで粉々に叩き壊すシア。

何度も何度も……何度も何度も何度も繰り返してドリユッケンを叩きつけるシ

ア。

ふと、石版があつた場所の下に文字がある事に気付いたシア。

「ざんねくん♪ この石版は一定時間経つと自動修復するよお〜プークスクス!!」

「ムキィー!!」

濃厚な一族(?)さえもついにブチ切れた。

更に激しくドリユツケンを振り始め、部屋全体が小規模な地震が発生したかのように揺れ、途轍もない衝撃音が何度も響き渡る。

「ミレディ・ライセンだけは『解放者』云々関係なく、人類の敵で問題ないな」

「……激しく同意」

~~~~~

おおよそ原作の流れなのでカット。

謎の白い濁った液に流されたり、岩の球に追いかけられたり、岩を砕けば溶解液を撒き散らす鉄の球に追いかけられたり……あ、致死性のない毒サソリ達は美味しくいただきました。

もう神代魔法とかどうでもいい、この大迷宮ごと喰ってやろうか……なんて思い始め

たとき。

騎士甲冑の並ぶ部屋にたどり着いた。

あのミレディ・ライセンのことだ、お約束とか絶対にやる。

なので動き始める前に錬成で溶かそうと近づけば、ガコンツ！  
兜の隙間から見えている眼の部分がギンツと光り輝いた。 という音と共に、

遅かったかー。

そうして現れたのはさまようヨロイ50体。

弱腰のシアをハジメとユエが励ましている間に、数を減らそうと砕いてみる。

一体一体はそう強くない。

しかし、バラバラにした破片がいつのまにか消え、元の50体に戻っている。

ふむ……

「ハジメ！ 食っていい？」

「背に腹は変えらんねえ。感応石は欲しいが……いいぞ！」

いったただつきまーす！

ハジメから許可も得たので、襲いかかってきた騎士甲冑の剣を、文字通り砕いて食べる。  
敵を壊しても壊しても、破片が集まって復活する？

それは破片がそこに残っているからなんだよ。

逆に考えるんだ、破片を集められなくすれば良い。

そう考えるんだ。

剣を食われて操作主が動揺したのか、コントロールが乱れた。

その隙に頭を丸かじりにする。

私の咬合力は15070です。

さらに四肢を噛み砕き、食べる。

まだ動くということは、感応石ついているのは胴体にあるのだろうか？一度砕いて中身を確認。

空っぽである。

もしかしたらこの騎士甲冑自体が感応石製なのかなと思いつつ、完食。

これで残りは49体！　そう思っていると、騎士甲冑たちは奥の扉へ逃げていった。

私達が奥の扉に着いた時には、封印されていた。

扉には薄く

“とつけるかなあ、とつけるかなあ”

“早くしないと死んじゃうよお”

“まあ、解けなくても仕方ないよお！ 私と違って君は凡人なんだから！”

“大丈夫！ 頭が悪くても生きて……いけないねえ！ ざんねえくん！ プギャ

アー！”

と彫つてあつたが、特に何が襲つてくるわけでもないの……

「……開いた」

「早かつたな、流石ユエ」

部屋の中にあの騎士甲冑はいなかった。

あれ？ と思つたら急にGがかかり、部屋が動いている事がわかる。

しばらくじつとしていて、扉が開いた。

……見覚えのある、ライトアップされた石版。

“ねえ、今、どんな気持ち？”

“苦勞して進んだのに、行き着いた先がスタート地点と知つた時つて、どんな気持ち

？”

“ねえ、ねえ、どんな気持ち？ 　どんな気持ちなの？ 　ねえ、ねえ”

「「「……」」」

“あつ、言い忘れてたけど、この迷宮は一定時間ごとに変化します”

“いつでも、新鮮な気持ちで迷宮を楽しんでもらおうというミレディちゃんの心遣い

です”

“嬉しい？ 嬉しいよね？ お礼なんていいよお！ 好きでやってるだけだからあ

！”

“ちなみに、常に変化するのでマツピングは無駄です”

“ひよつとして作ちやった？ 苦労しちやった？ 残念！ プギヤア”

「は、ははは」

「フフフフ」

「フヒ、フヒヒヒ」

「あは、ははは」

その後、迷宮全体に届けと言わんばかりの絶叫が響き渡ったのは言うまでもない。

書いてあった通り、扉の先はさつきとはまるで別物だった。

……再構成できないように、食い散らかしながら進んでやる！

そう決心し、この大迷宮に入って1週間が過ぎた。

またあの騎士甲冑部屋だ。

予備から補充されたのか、50体に戻っている。

それらが動き出すより早く、私達は次の扉へ駆け出した。

ハジメがロケットランチャーのオルカンで扉ごと壁を破壊し、そこに飛び込む。

そこは真つ暗な空間であった。

不思議なことに、ブロックが浮いており、私達はその一つに乗っている。

不思議な空間だなー。

「逃げてえ！」

「!?!」

シアの警告に、咄嗟にシアを抱えて他の足場に飛び移った。

ユエはハジメに抱き抱えられている。

ズウガガガン!!

直後、隕石のような何かが私たちが居たブロックに降ってきた。

流星にアレを食らったら死んでたかもしれないし、生きていても足場がなくなつて落

ちていただろう。

「シア、助かったぜ。ありがとうよ」

「……ん、お手柄」

「助かった」

「えへへ、〃未来視〃が発動して良かったです。代わりに魔力をこつそり持つて行かれ

ましたけど……」

シアの未来視が自動発動する原因は一つ。

つまりアレは躲さなければ、シアが死んでいたということだ。戦慄しながら、通過していった隕石モドキの方を見やった。

ブロックの淵から下を覗くと、何かが動いたかと思うと猛烈な勢いで上昇してきた。それは瞬く間に私達の頭上に出ると、その場に留まりギンツと光る眼光をもつて私達を睥睨した。

それは巨大な騎士甲冑だった。

右手は白熱化し、左手にはモーニングスターを装備している。

……ふむ。

「ドーマ。ゴーレムⅡサン。ニイカワⅡネオです」

「え!? あ、どうも。ミレディ・ライセンです? ……この体になってから初めて、

向こう側挨拶されたよ」

アイサツはオジギと共に言う、ニンジャのイクサには欠かすことの出来ない絶対の礼儀作法だ。

アイサツが済む前に攻撃を仕掛けることはスゴイ・シツレイにあたる。古事記にもそう書いてある。

「「「……は?」」」

つて、ミレディ・ライセン!?



コイツが解放者でこの大迷宮の製作者で、人類の敵か！

「ミレデイ・ライセンは人間で故人のはずだろ？　まして、自我を持つゴーレム何て聞いたことない……お前が何者か説明しろ。簡潔にな」

「あれえ、こんな状況なのに物凄く偉そうなんですけど、こいつう」

流石に、この反応は予想外だったのかミレデイを名乗る巨体ゴーレムは若干戸惑ったような様子を見せる。

が、すぐに元のイラつく雰囲気に戻った。

「んふふ。教えてあげない！」

「どーしても知りたいなら、好評発売中の外伝小説、零を買うといいよー」

ハジメの尋問が終わり、特に情報を渡す気がないと理解。

問答無用でブツパされるハジメのオルカン。

ズガアアアアン！！

「やりましたか!？」

「……シア、それはフラグ」

このダメウサギは何という事を言ってくれたのでしょうか。

やはりフラグウサギ戦犯、慈悲はない。

煙から出てきたミレデイは盾にした前腕部の一部が碎けていたが、それは他の浮いて

るブロックを素材にして修正された。

「ふふ、先制攻撃とはやってくれるねえ、さあ、もしかしたら私の神代魔法が君のお目当てのものかもしれないよ、私は強いけど、死なないように頑張つてねえ」  
そういつて撃ち出されたのはモーニングスター。

振るうような予備動作は一切なく、あのモヤツ○ボールみたいなのが私達に向けて飛び出してきた。

受け止めたところで足場のブロックが持たないので、別の足場へ移動。

ブロックは木つ端微塵になった。

ボール部分はふよふよと彷徨う動きを見せた後、ミレディの手元に戻った。

それとは別に、さっきの騎士甲冑が後ろから襲いかかってくる。

それはユエが、くるり身を翻しながらじやらじやらぶら下げた水筒の一つを前に突き出し横薙ぎにした。

「あはは、やるねえ、でも総数五十体の無限に再生する騎士達と私、果たして同時に捌けるかなあ」

……よし。

「ミレディは任せた。騎士甲冑を食べてくる」

今度は逃げて再生成する暇は与えない。

いただきます。

~~~~~

「ごちそうさまでした。

「ハジメさん、ユエさん、音緒さん！

避けてえ！

降ってきますす！」

シアの忠告に何かが来ると理解。

即座に瞬光を発動、上を確認する。

空間が鳴動し、天井そのものが落下し始めていた。

1個あたり10トン以上はあると思われる天井を構成する岩のブロック。

そんなものが雨のように降りはじめた。

急いで近くにいたユエと合流、同時に7色の槍全てを手の届く範囲に出現させた。

ユエが破断でまだ遠くにあるブロックをいくつか破壊、すぐ近くまで来たブロックや

大きめのブロック片は私が砕き、穿ち、叩き落す。

瞬光でも対応しきれない物量なので、重ねて限界突破も発動。

ステータスが一時的に3倍になるはずが、魔力分解作用に阻まれ消え掛ける。

しかし環境適応で微かにステータスが上昇したままになり、加えて感知能力は3倍の

ままだ。

瞬光と限界突破の二重発動という、文字通り体の限界を超えた事による反動を受けながらも、ついに私とユエが脱出出来そうなくらいの隙間が、ブロックの雨の中にできた。

私はユエを抱え、降り注ぐ岩の雨を飛び越える。

「うーん、やっぱり、無理だったかなあ、でもこれくらいは何とかできないと、あのクソ野郎共には勝てないしねえ」

ミレディは私達が死んだと思ったのか、降り注いだ岩を散会させて死体探しを始める。

「そのクソ野郎共には興味ないって言っただろうが」

「えっ?」

ハジメはミレディの後ろのブロックに着地していた。

驚き半分、嬉しさ半分のような声を上げて振り向いたミレディに対し、背後にいたユエの破断が炸裂した。

各部位の表面装甲を切り裂いたが、ミレディはこちらに見向きすらしない。

しかしその隙にハジメがアンカーを使って肉薄、シユラーゲンから連続して発射される、電磁加速したフルメタルジャケット弾もどきによりミレディが浮遊する他のブロックに叩きつけられた。

「凍って！　凍極！」

魔力分解作用により上級魔法は発動できない……が、先程破断で全身に浴びせた水が凍り、ミレデイとブロックを固定した。

「よくやったぞ、ユエー！」

体を固定されたミレデイの胸部に立ち、ハジメが宝物庫から切り札を取り出す。

直径20cm、長さ1.2m……4トンもの鉱石を圧縮錬成によりこのサイズまで縮め、アザンチウム鉱石でコーティングした世界最硬かつ最重の漆黒の杭。

それを圧縮燃焼粉と電磁加速により、高速回転させながら撃ち出すパイルバンカーだ。

「存分に食らって逝け」

ゴオガガガン!!!

その杭はミレデイの核を守る、アザンチウム鉱石の装甲に大きくヒビを入れ、少しずつめり込んでいく。

「ハ、ハハ。どうやら未だ威力が足りなかったようだねえ。だけど、まあ大したものだよお？　半分くらいは貫けたんじゃないかなあ？」

若干、かたい声で、それでも余裕を装うミレデイ。

だが半分貫けたなら、大丈夫だろう。

「やれ！ シア！ 音緒！」

ハジメが合図と共にパイルバンカーを杭を残して消し、その場を離れる。

「じゃあシア、全力でいくよ」

「はい！ ですよ！」

天井に居た私は自分を固定していた槍を抜いて自由落下を始め、十分な速度が付いたあたりでシアを豪腕を使った全力でぶん投げた。

豪腕の効果も魔力分解作用により一瞬で無効化される……が、一瞬は発動するのだ。つまり一瞬で振り切れればいい。

そんな脳筋なやり方で自然落下の数倍の速度で落下していくシア。

シアは、そのままシヨットシエルを激発させ、その衝撃も利用して渾身の一撃を杭に打ち下ろした。

ドゴオオオ!!!

更に沈み込む漆黒の杭。

そして繰り返し激発するシヨットシエル。

ドゴンッ！ ドゴンッ！ ドゴンッ！ ドゴンッ！ ドゴンッ！ ドゴンッ！

ンッ！

「あああああああ!!」

浮遊ブロックごと落下していくミレデイとシア。

地面に激突したとき、ついに装甲を超え、ピシリと核にヒビが入る音がした。

シアがドリユツケンを起点に宙返りし、身体強化を全て脚力に注ぎこみ、遠心力を込めた蹴りを叩き込んだ。

シアの蹴りを受けて更にめり込んだ杭は、核の亀裂を押し広げ……遂に完全に粉碎した。

ホツと一息つきながら、最後まで頑張ったシアを激励する。

いやー、いい話だなー……

「あのおく、いい雰囲気で悪いんだけどおく、そろそろヤバイんで、ちよつといいかなあ
ら？」

核は完全に砕いたというのに全く、このしぶとさはまるでゴキブリのようだ。

憎まれっ子世に憚るとはこのことか。

今度こそトドメを……

「ちよつと、ちよつと、大丈夫だつてえく。試練はクリア！ あんたたちの勝ち！

核の欠片に残った力で少しだけ話す時間をとっただけだよおく、もう数分も持たないから」

その言葉を証明するように、ミレデイはピクリとも動かず、眼に宿った光は儚げに明

滅を繰り返している。

……いや、死んだふりかも？

「なんでそんなに疑り深いのさ……」

この大迷宮を超えた結果です。

「で？ 何の話だ？ 死にぞこない。死してなお空気も読めんとは……残念さでは

随一の解放者つてことで後世に伝えてやろうか」

「ちよつ、やめてよお、何その地味な嫌がらせ。ジワジワきそうところが凄く嫌らしい」

「で？ クソ野郎共を殺してくれっていう話なら聞く気ないぞ？」

私達の目的は帰還なのだ。

そんな些事に拘っている暇はない。

「言わないよ。言う必要もないからね。話したい……というより忠告だね。訪れた迷宮で目当ての神代魔法がなくても、必ず私達全員の神代魔法を手に入れること……君の望みのために必要だから……」

「全部ね……なら他の迷宮の場所を教えろ。失伝していて、ほとんどわかってねえんだよ」

「ああ、そうなんだ……そっか、迷宮の場所がわからなくなるほど……長い時が経ったん

だね……うん、場所……場所はね……」

そして場所を話していくミレデイ。

言った通り力が尽き掛けているのか途切れ途切れだったが、なんとか聞き出せた。

「以上だよ……頑張つてね」

「……随分としおらしいじゃねえの。あのウザったい口調やらセリフはどうした？」

どうやら狂った神ことクソ野郎は、相当性格が悪いらしい。

慣らすためにも、真似をしていたのだとか……？

いや、まあ、性格が悪いのは、戦争を遊戯にしてる時点で相当だろうし……

そう考えていると、おもむろにユエがミレデイの傍へと寄つて行つた。

既に、ほとんど光を失っている眼をジツと見つめる。

「何かな？」

囁くようなミレデイの声。

それに同じく、囁くようにユエが一言、消えゆく偉大な解放者に言葉を贈つた。

「……お疲れ様。よく頑張りました」

「…………ありがとね」

「………ん」

もういいからさっさと神代魔法寄越せやおらー、なんて考えるとハジメと一緒にシア

に口を塞がれた。

「……………さて、時間の……………ようだね……………君達のこれからが……………自由な意志の下に……………あらんことを……………」

オスカーと同じ言葉をハジメ達に贈り、解放者の一人、ミレディは淡い光となって天へと消えていった。

1章5話縛りでもしてたっけ？ 文字数稼ぎに走った

10話

私達の乗る浮遊ブロックが自動で滑るように移動し始めた。

それは光で封鎖されていた白い通路を進んでいき、オルクス大迷宮で見た、あの最後の扉と同じ紋様が彫られた壁を超えて進んでいった。

くぐり抜けた壁の向こうには……

「やつほー、さっきぶり！ ミレデイちゃんだよ！」

ちっこくデフォルメされたミレデイがいた。

「……」

「ほれ、みろ。こんなこつたらうと思つたよ」

シアとユエ、絶句。

特になんかこう……良い感じのセリフを言つてたユエがヤバイ。

「あれえ？ あれえ？ テンション低いよお〜？ もつと驚いてもいいんだよお

〜？ あつ、それとも驚きすぎても言葉が出ないとか？ だったら、ドッキリ大成

功お〜だね☆」

そつとユエとシアに手頃な石を手渡す。

「テへ、ペロ☆……え、ちよ! やめっ!」

ガツ! ゴツ! ズドツ!

とりあえずみんなで気がすむまでフルボッコにした。

ミレデイ・ライセンは人類の敵、慈悲はない。

「いててて……このボデイは貧弱なんだから、気をつけて扱ってよね!」

ハジメは話を聞いていない。

ユエとシアはもう一度、手頃な石を振り上げた。

ミレデイは大人しくなった。

ハジメはおもむろに近くにあつた魔方陣を調べ始めた。

慌ててミレデイが止めに入る。

「君いく勝手にいじっちゃダメよお。ていうか、お仲間でしょ! 無視しないで止

めようよお!」

そんな文句を言いながらミレデイはハジメの背後に回り、石を振り上げている二人の悪鬼に対する盾にした。

「……ハジメどいて、そいつ殺せない!」

「退いて下さい。ハジメさん。そいつは殺ります。今、ここで!」

「まさか、そのネタをこのタイミングで聞くとは思わなかった。つていうかいい加減遊んでないでやる事やるぞ」

ハジメの背後で「そうだ、そうだ、真面目にやれえ！」などとはやし立てたミレディはアイアンクローをされた。

ミシミシというか、メキメキという物が壊れる音がしている。

「このまま愉快なデザインになりたくなきや、さつさとお前の神代魔法をよこせ」

「あのおく、言動が完全に悪役だと気づいてっ『メキメキメキ』了解であります！ 直ぐに渡すであります！ だからストープ！ これ以上は、ホントに壊れちゃうー！」

壊れても……いいのよ？

あ、コイツまじで壊しかねないと理解したのか、ミレディは魔方陣を起動した。

4回ペカーツと光り、各々神代魔法を手に入れた。

「これは……やつぱり重力操作の魔法か」

「そうだよくん。ミレディちゃんの魔法は重力魔法。上手く使つてね…つて言いたいところだけど、君とウサギちゃんは適性ないねえくもうびつくりするレベルでないね！」

重力魔法か……ハウリアに使わせてみたいな。

「悪食ちゃんと金髪ちゃんは適性ばつちりだね。修練すれば十全に使いこなせるようになるよ……つて、胸周りの重力を重くしても大きくはならないよ……？」 やめてよそ

んな顔で見るの」

ユエ……

「おい、ミレディ。さっさと攻略の証を渡せ。それから、お前が持っている便利そうなアーティファクト類と感応石みたいな珍しい鉱物類も全部よこせ」

「……君、セリフが完全に強盗と同じだからね? 自覚ある?」

ジト目(?)でそう言いながらも、おそらく宝物庫から証の指輪と鉱石を取り出した。ハジメはそれを問答無用で自分の宝物庫に移し替える。

「おら、他にも持ってたんだろ。ジャンプしてみろよ。ほらほら」

「んもー! これ以上は何も出ないわよお!」

チャリンチャリンと、いくつかの鉱石がこぼれ落ちた。

「本当か? 服に中にまだ持ってたんだろ」

「きゃーっ!? セクハラー!!」

そういつてハジメはミレディのスカートの中を漁り始めた。

誰がどう見ても、事案である。

「もー! コツチのスカートならいつでもウエルカムですのに!」

「お前のスカートからはアーティファクトも鉱物も出てこないだろ!」

「あんた最低だな!」

その後宝物庫まで強だ……譲ってもらおうとしたハジメにキレたのか……

「はあく、初めての攻略者がこんなキワモノだなんて……もう、いいや。君達を強制的に外に出すからねえ！ 戻ってきちやダメよお！」

ガコンツ！

「！！！！！！！！」

罨の作動音と共に四方の壁から大量の水が流し込まれ、まるで便所のように没シュートされた。

ハジメは置き土産に、手榴弾を投げていた。

「ひにゃああー！！」

そんな悲鳴が最後に聞こえた……気がした。

m 9 (^ 口 ^)

~~~~~

没シュートされた私達は、気づけばどこかの川の中にいた。

近くを魚が泳いでいる。

その内の一匹が、いつの間にか必死に息を止めているシアの顔のすぐ横を並走ならぬ

並泳していたのに気づいた。

何となし、その魚に視線を向けるシアと私。

目があった。

目があった魚はどこかふてぶてしさと無気力さを感じさせるそのおっさん顔の人間魚だった。

あの懐かしきシーマ○を彷彿とさせた。

なんだコレ、なんだコレ。

“何見てんだよ”

ブフオツ!?

いきなり舌打ち付きで直接頭に届いた念話に驚き、口から空気を吹き出してしまった。

ヤバっ！ 溺れる………！

それでもなんとか同じように空気を吐き出し、溺れて白眼を向いているシアを掴む。

「どうわああああー!!」

「んっーっー!!」

「……ッ!!」

「……………」



私達は岸の側に流されていた。

シアを抱えながら、なんとか岸にあがる。

ドリユツケンがあるせいで、かなり重い。

宝物庫？ 多分今開けたら、水ごと流し込まれてたよ。

「ゲホツ、ガホツ、くくつ、ひでえ目にあつた。あいつ何時か絶対に破壊してやる。ユエ、

音緒、シア。無事か？」

「ケホツケホツ……ん、大丈夫」

「ゲホツ、ゲホツ……シアがヤバイ。ハジメ、任せた」

大分飲んでしまった。

ヒュー、ヒューと、浅い呼吸しか出来ない。

なんとか胃の中の水を吐き戻している間に、ハジメがシアに人工呼吸をしていた。

目を覚ましたシアは発情したのか、ディープな方のアレをしながらハジメに襲いか

かっていた。

やはり残念ウサギ筆頭、頭がとても残念だ。

「わっわっ、何!?! 何ですか、この状況!?!」

みついで……は、激しい……お外なのに!

あ、あの宿屋の娘だ。

す、すごい……濡れ濡れで、あんなに絡

ア、アブノーマルだわっ!」

その側には漢女がいる。

未だ、吸い付いてくるシアを、ハジメは体ごと持ち上げ、そしてシアのムツチリしたお尻を鷲掴みにして激しく揉みしだいた。

「あんっ！」

思わず喘ぐシア。

力が緩んだ一瞬の隙を逃さず、ハジメはペイツ！ とシアを引き剥がすとそのまま泉に放り込んだ。

「うきやあああ！」

ドボンッ！

「ゆ、油断も隙もねえ。蘇生直後に襲いかかるとか……流石に読めんわ」

アレが救命活動だと知っている私と違い、いきなりキスをしたと思っていそうな、目の光が消えたユエに事情を説明した。

その後漢女……クリスタベルさんにここがブルックの街から1日程度の距離にある泉だと聞いた。

彼女たちが乗ってきた馬車に相乗りさせてもらい、ブラックの街に行くことにした。

そういえば、1週間ぶりの日光だな……大迷宮は、一回入ると出れないのが普通なのかな？

そんなことを考えながら、ゆっくり歩く馬……ハジメの魔力駆動2輪と比べれば、大  
体ゆっくりだが……に揺られていた。

~~~~~

何のプロットも無しに書き始めた作者馬鹿による作者馬鹿のためのオリキャラ紹介

・新川音緒

本作で突っ込んだオリヒドイン。天職は健啖家。元ネタは「トリコ」より「ネオ」と
「モンスターハンター」より「イビルジョー」。

原作のない世界から（もしくは未読）の転生者で、特典は特になし。健啖家転生前なのは昔
から。

ハジメに惚れた経緯や家族間の話をいつか出来れば良いなと思ってる。

元々は黒髪黒目という普通の日本人だったが、魔物を喰ったことにより変色。まだら
な深緑色の髪、赤黒い目になった。イビルジョーの体色と目の色のイメージ。

転移前には白崎香織と八重樫雫と一緒に、3大女神と呼ばれていた……が、隠すこと
のないオタク気質とハジメへの求愛行動のせいで、2人ほど人気はない。

伊勢神宮で出会った女性に一夫多妻去勢拳を習っていたり、割と転移前からファンタ

ジーしてた。

大食い＋幼馴染＋毒舌(?)＋転生者＋ヤンデレ(にしたかった)属性

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

新川音緒 17歳 女 レベル:???

天職:健啖家

職業:冒険者

ランク:

青

筋力:15100

体力:12720

耐性:13110

敏捷:14060

魔力:15010

魔耐:15010

技能:錬成[＋精密錬成]・消化吸収[＋魔力捕食][＋無機捕食]・魔力操作[＋魔力

放射][＋魔力圧縮][＋遠隔操作][＋属性変化]・胃酸強化・纏雷・氷結・毒物生成[＋

麻痺鱗粉][＋神経支配]・天歩[＋空力][＋縮地][＋豪脚][＋瞬光]・風爪・夜目・遠

見・気配感知[＋特定感知]・魔力感知[＋特定感知]・熱源感知[＋特定感知]・気配遮

断[＋幻踏]・先読・環境適応[＋状態異常耐性]・金剛[＋白熱][＋炸裂装甲]・豪腕・

多分死にスキル。

名前すらつけられない魔物を食べて取得。

*毒物生成

体内で毒を作れる。

麻痺鱗粉は原作様でハジメがサイクロプスに使ってたアレ。

神経支配はエセラウネより取得。

ただ、毒とか使うより殴った方が早いし、てこずるような強い相手は毒無効がデフォ。

死にスキル。

*環境適応

モデルはイビルジョーとグルメ細胞。

どんな環境でも、動作に支障をきたさない。

ただし、初めてで耐性がない場合は、適応するまで影響を受ける。

*白熱

金剛の派生技能。

熱されると金剛の強度が上がる。

タウル鉱石より取得。

*炸裂装甲

金剛の派生技能。

敵の攻撃に対し、魔力の爆破によるカウンターを行う。

発動後、10秒間金剛が使用できなくなるデメリットがある。

燃焼石より取得。

*7色の槍

ヒュドラの遺骨から作り出した一品……七品物？

それぞれ別の頭に関わる骨で作られており、生前の能力を使える。

あれ？ 極光と回復、精神攻撃以外はハジメが作れたんじゃないか？

と違って

も、気にはしていない。

神代魔法適性（予定）

生成魔法：ほぼ無し

重力魔法：ユエに少し劣る程度

空間魔法：自分の転移が精一杯程度

再生魔法：最高値

魂魄魔法：それなり

昇華魔法：それなり

変成魔法：最高値